Graduate School
SENZOKU GAKUEN
Concert Series

大学院コンサートシリーズ
洗足学園音楽大学　大学院音楽研究科
2020年度

修了演奏会

2021年1月
15日(金)、18日(月)、19日(火)、20日(水)、
21日(木)、22日(金)、23日(土)

洗足学園 前田ホール

洗足学園音楽大学

ごあいさつ

本日は洗足学園音楽大学大学院「2020年度 修了演奏会」にご来場くださいまして誠にありがとうございます。

この「修了演奏会」は、大学院においての2年間に亘る研究の集大成となる最終試験を、公開で行う演奏会でございます。

大学院生はそれぞれの専門領域を幅広い視野から研究、自己の音楽を表現すべく日々練磨してまいりました。また、この演奏会における楽曲に関連した副論文を作成し深奥を究め、修了に向けて口頭試問を受けることとなります。

皆様にはこの演奏会の意義をご理解頂きまして、御高評を賜りたく存じます。

大学院生達は本学大学院での研鑽の日々により、音楽界における次代を担う人材として、終わりなき音楽の道を歩んでくれるものと確信しております。

さらには、この前田ホールのステージから世界の桧舞台へと羽ばたいていけるよう、皆様には今後とも温かくお見守り頂きたく、心よりのお願いを申し上げます。

洗足学園音楽大学・大学院
大学院音楽研究科長
教授　小嶋 貴文

⚠ 新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐためのお願い

- マスク着用の徹底、こまめな手指消毒、手洗い、咳エチケットの励行にご協力ください。
- 大声や対面での会話はお控えください。
- 演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
- 休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
- 客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
- 出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
- 万一、集団感染の発声が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

⚠ 遠隔審査につきまして

本年度の研究・修了演奏会は、新型コロナウイルス感染症の影響を鑑みて希望者は遠隔審査となります。本冊子には全受験者のプログラムが記載されておりますが、当日ホールでの演奏が行われないプログラムがある場合がございます。予めご了承下さい。

2021

15 FRI 修了演奏会

弦楽器（院2）

◎ 13:00 開演 [12:30 開場]
押見 純代　藤岡 瑞季　北川 乃梨子

◎ 15:00 開演
木村 蒼　吉田 智海　友原 安佐子

◎ 16:30 開演
有福 佑依　林 桃子　山口 亜純

18 MON 研究演奏会※ 修了演奏会

クラシックギター（院2）

◎ 10:00 開演 [9:30 開場]
大貫 淳也　YAN SHI★
HEI SHENGYU★

和楽器（院1・院2）

◎ 12:30 開演 [12:00 開場]
FENG RUI（院1）※　WU SHANGMEIYUE（院2）

声楽（院2）

◎ 14:00 開演
板倉 春菜　壽美 玲子　原 芽衣

◎ 15:20 開演
池田 実来　ZHANG HAN

※は別冊の「研究演奏会」プログラムをご覧下さい。

19 TUE 研究演奏会※ 修了演奏会

金管楽器（院1）

◎ 10:00 開演 [9:30 開場]
望月 稜香※

木管楽器（院2）

◎ 10:40 開演
持田 夏希　尾崎 ゆか

木管楽器（院2）

◎ 11:55 開演
YU QINZI　伊藤 仁美

木管楽器（院2）

◎ 14:00 開演 [13:30 開場]
前原 希美　LI HUAYU

◎ 15:20 開演
三輪 桃子　永田 博雅

※は別冊の「研究演奏会」プログラムをご覧下さい。

20 WED 研究演奏会※ 修了演奏会

打楽器（院2）

◎ 10:00 開演 [9:30 開場]
角田 和渉　LIU JIN
HSIEH SHENGHUNG

打楽器（院2）

◎ 12:05 開演
島津 翠　石川 まみ

弦楽器（院1）

◎ 14:30 開演 [14:00 開場]
有馬 憧※　大森 陸 リチャード※
菅野 稚子※

◎ 15:55 開演
髙橋 沙織※　ZHANG WEICHEN※

◎ 17:00 開演
成田 叶※　濱 萌香※

※は別冊の「研究演奏会」プログラムをご覧下さい。

★は遠隔受験者のため動画審査となり、ホール内では演奏いたしません

21 THU
研究演奏会※
修了演奏会

電子オルガン（院1）
◎ 10:00 開演 [9:30 開場]
YAN YANGBING※　WANG QINGZI※
WANG WENHAO※　ZHOU SHAOHUI※
◎ 11:25 開演
XU HUAMIN※　JIN TINGYAN※
DU DANYANG※

電子オルガン（院1）
◎ 13:40 開演 [13:10 開場]
DENG RUOHENG※　LI MULAN※
SUN YUPENG★※

電子オルガン（院2）
◎ 14:45 開演
CHEN YUJIN　XU JINGWEN
◎ 15:50 開演
ZHANG LEIQIAN　WEN JINGXI
WANG XICHEN★

※は別冊の「研究演奏会」プログラムをご覧下さい。

22 FRI
研究演奏会※
修了演奏会

ピアノ（院1）
◎ 10:00 開演 [9:30 開場]
河原 萌恵※　JIANG SUTING※
瀬筒 秀樹※

ピアノ（院1）
◎ 12:15 開演 [11:45 開場]
髙城 美希※　田中 広輝※　林 菜月※

二胡（院1・院2）
◎ 14:15 開演 [13:45 開場]
CHEN ZIZHUO（院1）※　ZHU BAIQING（院2）

作曲（院2）
◎ 15:15 開演
吉田 健人　原 雅史

※は別冊の「研究演奏会」プログラムをご覧下さい。

23 SAT
修了演奏会

ピアノ（院2）
◎ 10:00 開演 [9:30 開場]
隈元 沙綾　加藤 瑞穂　相田 実久

ピアノ（院2）
◎ 12:45 開演 [12:15 開場]
森合 爽子　有賀 瞳　門岡 明弥
◎ 14:25 開演
橋本 和磨　丸橋 みなみ　石津 若菜
◎ 16:20 開演
中世古 達也　竹﨑 聡子　服部 直士

26 TUE
研究演奏会※

木管楽器（院1）
◎ 10:00 開演 [9:30 開場]
五十嵐 蓮※　澁谷 隆宏※　XIAO QIANYI※
◎ 11:20 開演
CHENG YI-CHIEH※　府川 悠理※

木管楽器（院1）
◎ 12:20 開演
山崎 春奈※　吉村 由望※

声楽（院1）
◎ 13:30 開演
石川 敦也※　後藤 ゆずか※
ZHANG YIJIAO※
◎ 14:40 開演
鈴木 彩生※　CHEN YINGJIE※　長島 彩※
◎ 15:50 開演
村田 涼※　YOU PAN※
脇屋敷 美里※　渡辺 華子※

※は別冊の「研究演奏会」プログラムをご覧下さい。

★は遠隔受験者のため動画審査となり、ホール内では演奏いたしません

1 15 FRI

弦楽器
13:00

1. 押見 純代（ヴァイオリン）　Pf. 宇田川 日和

G.ルクー ／ ヴァイオリン・ソナタ ト長調
Guillaume Lekeu (1870-94) // Sonate en Sol majeur pour violon et piano
第1楽章　Très modéré - Vif et passionné（きわめて中庸に - 活発に、そして情熱的に）
第2楽章　Très lent（きわめてゆっくりと）
第3楽章　Très animé（きわめて生き生きと）

【解説】
心が惹き込まれる序奏。扉を開けると、様々なモチーフが織り重なり、光に彩られた世界が広がる。ベルギー生まれのギヨーム・ルクーは、パリで同郷のフランクに師事し、常に全力で音楽に向き合った。ベルギーのローマ賞コンクールで2等賞を得るも納得できず受賞を辞退した。彼の曲に感銘を受けたベルギーのヴァイオリニスト、E.イザイが依頼し1892年に本作品が誕生した。初演・献呈者ともイザイである。ルクーは、将来を嘱望されたが、この曲の完成から2年後、24歳で夭逝する。

このソナタは、フランクの循環形式を取り入れ、複数の循環テーマが異なる表情で繰り返し現れる。後期ベートーヴェンとワーグナーの影響を受け、柔らかな情感とほとばしる情熱、逡巡と決断、弛緩と緊張、静と動。楽想のコントラストが印象的である。

第1楽章は序奏付ソナタ形式で書かれている。誰をも包み込む温かい光のようなテーマで「始まり」を語る序奏。対照的に主部は、複数のテーマを織り込みながら、ヴァイオリンとピアノが情熱的に重なり合い、先を求め往き、再び平穏な世界へ戻る。三部形式の第2楽章は、温かさと翳りを合わせ持つ響きに、望郷の心とむせび泣く声が感じられる。第3楽章の冒頭では決意を語ると、ピアノの動きに乗り、活気に満ちて前へ突き進む。中間部で第1楽章の序奏が現れ、恍惚的な響きに逡巡するが、遠くから繰り返すピアノの動機により目覚め、再び前へ向かい、輝く光に向かって駆け抜ける。この曲は、全力で創作し短い人生を駆け抜けたルクー自身を象徴しているようだ。ベルギー同郷音楽家の縁に紡がれて誕生したこの珠玉のヴァイオリン・ソナタを大切に演奏したい。

Profile
愛知県出身。洗足学園音楽大学弦楽器コース卒業。音楽物語制作と社会貢献音楽活動の実績により2019年東久邇宮記念賞、東久邇宮文化褒賞を受賞。ヴァイオリンを小林 すぎ野、Ray Chang、西尾 ヨシ子、廣岡 克隆、公門 俊之、安藤 貴子、室内楽を Jan Loeffler、川田 知子、羽川 真介、ヴィオラを安藤 裕子、ピアノを山本 緑の各氏に師事。保育園、幼稚園、地域の子育てサロン、高齢者施設や病院等において、社会貢献を目的としたコンサートのプロデュースとアウトリーチの演奏活動を行っている。また、音楽を身近に楽しんでいただけるように、クラシック音楽をはじめ、日本古来の音楽や世界の様々な音色を用いた音楽物語の創作、絵本や紙芝居と音楽のコラボレーション作品を制作し、物語コンサートを企画開催している。

2. 藤岡 瑞季（ヴァイオリン）　Pf. 田中 麻紀

D.ショスタコーヴィチ ／ ヴァイオリン協奏曲 第1番 イ短調 作品77
Dmitry Shostakovich (1906-75) // Violin Concerto No.1 in A minor op.77
第1楽章　Nocturne（夜想曲）
第2楽章　Scherzo（スケルツォ）
第3楽章　Passacaglia（パッサカリア）
第4楽章　Burlesque（ブルレスケ）

【解説】
20世紀ロシアの作曲家ショスタコーヴィチは、革命とその後の混乱の時代を生き、体制からの批判や圧力にさらされながらもそれに耐え、大作曲家としての地位を保った。《ヴァイオリン協奏曲 第1番》は、オイストラフとの交友から生まれた協奏曲である。1948年に完成していたが、同年ジダーノフ批判が始まったため、すぐに初演されることはなかった。1953年のスターリンの死後に発表した《交響曲 第10番》が政府から歓迎された流れで、作曲から7年経った1955年に披献呈者のオイストラフとレニングラード国立交響楽団によって初演された。緩急緩急の全4楽章からなる異例な構成で、ショスタコーヴィチのイニシャルである「DS (Es) CH」の音列が度々現れる。第1楽章ノクターン、終わりの見えないようなモノローグが長い導入部となり、終始何かに不安を感じながら過ごす作曲者の心情を描いたような音楽。協奏曲の第1楽章に夜想曲を持ってくること自体が異例で、調性音楽が必須であった状況下で書かれた調性の定まらない楽章である。第2楽章スケルツォ、軽やかだが辛練な曲である。主題は《交響曲 第10番》第3楽章冒頭に類似する。第3楽章パッサカリア、祈りの歌のような旋律の後で変奏が続く。繰り返される低音の旋律は第2楽章の中盤に出てくる旋律に由来している。長大なカデンツァは作曲家自身のモノローグである。「私はここにいる!」とばかりに「DSCHの動機」を演奏し、曲は休みなく第4楽章へ。第4楽章ブルレスケ、ユーモアと辛練さを兼ね備えた楽章。一見イ長調（調号#3つ）のように聴こえるが、調号は書かれていない。アクロバット的な演奏を繰り広げる。

Profile
大阪府出身。洗足学園音楽大学弦楽器コースヴァイオリン専攻を卒業。平成24年度神奈川県高文連ソロコンテスト教育長賞、最優秀音楽賞。第2回日本奏楽コンクール一般Aの部第2位（最高位）。第40回草津夏期国際音楽アカデミースチューデントコンサートにて西村朗音楽監督賞を受賞。学内コンサート『大学院コンチェルトの夕べ』オーディションに合格しソリストとして洗足学園音楽大学大学院管弦楽団、現田茂夫氏とチャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲を共演。これまでに、ヴァイオリンを勅使河原 真実、水野 佐知香の各氏に師事。室内楽を羽川 真介、安藤 裕子、川原 千真、安永 徹、市野 あゆみの各氏に師事。ピアノを田中 麻紀、松谷 幹子の各氏に、ヴィオラを大野 かおる、古川原 裕仁、須田 祥子の各氏に、ジャズヴァイオリンを maiko 氏に師事。

3. 北川 乃梨子（ヴァイオリン）

Pf. 田中 麻紀

J.ブラームス ／ ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品77
Johannes Brahms (1833-97) // Konzert für Violine und Orchester D-dur op.77

第1楽章　Allegro non troppo
第2楽章　Adagio
第3楽章　Allegro giocoso, ma non troppo vivace

【解説】

ロマン派の大作曲家であるブラームスは、様々な分野で素晴らしい名曲を沢山残しているが、ヴァイオリン協奏曲というジャンルではこの作品77だけを残している。そしてこの協奏曲は、ブラームスの数ある傑作の1つであるのと同時に、ベートーヴェンやメンデルスゾーンのものと並ぶ三大協奏曲と呼ばれ、現在もヴァイオリニストのレパートリーとして広く愛されている。

第1楽章、アレクロ・ノン・トロッポ、4分の3拍子、ソナタ形式。冒頭はヴィオラ、チェロ、ファゴットのゆったりとした第1主題で牧歌風に始まる。楽章全体は、この第1主題に沿って様々な表情を与えられながら進んでゆく。カデンツァはヨーゼフ・ヨアヒムのものを演奏する。第2楽章、アダージョ、ヘ長調、4分の3拍子、三部形式。ロマンティックで情感に満ち溢れている楽章である。中間部ではヴァイオリンが情熱的なメロディを奏でる。オペラは書かなかったブラームスであるが、この部分は「ヴァイオリンによるコロラトゥーラのアリア」とも評されている。第3楽章、アレグロ・ジョコーソ・マ・ノン・トロッポ・ヴィヴァーチェ、ニ長調、4分の3拍子、不規則なロンド・ソナタ形式。ハンガリーの民族音楽を取り入れた楽章。独奏に重音が多く見られ、いくつかの副主題を演奏した後、ヴァイオリンのカデンツァ風の部分が登場。さらにその後テンポを速めてコーダとなる。

Profile

石川県出身。4歳よりヴァイオリンを始める。洗足学園音楽大学弦楽器コース卒業。ナムユン・キム、オレグ・クリサ、フェデリコ・アゴスティーニ各氏の来校時に特別レッスンを受講。第21回、22回洗足学園音楽大学室内楽オーディション合格者による演奏会に出演。学内のオーディションにて、準セレクションチームに選抜され、室内楽演奏会に出演。ザルツブルク＝モーツァルト国際室内楽コンクール2020 in Tokyoに弦楽四重奏で参加し、奨励賞受賞。2017、2018年度ラ・フォル・ジュルネにオーケストラで出演。これまでにヴァイオリンを坂口 真紀、水野 佐知香の両氏に師事。室内楽を水野 佐知香、羽川 真介、北島 公彦、古川原 裕仁、大野 かおる、川原 千真の各氏に師事。

弦楽器
15:00

4. 木村 蒼（ヴァイオリン）

Pf. 田中 麻紀

H.ヴィエニャフスキ ／ ヴァイオリン協奏曲 第2番 ニ短調 作品22
Henryk Wieniawski (1835-80) // Violin Concerto No.2 in D minor op. 22

第1楽章　Allegro moderato
第2楽章　Romance: Andante non troppo
第3楽章　Allegro con fuoco - Allegro moderato

【解説】

1856年に着手された《ヴァイオリン協奏曲 第2番 ニ短調》作品22 は、ヴィエニャフスキにとっての代表作の一つである。ヴァイオリン協奏曲は2曲あり、本作品は、アウアーに呼ばれ、グノー、サン=サーンス、ラロ等の影響下に書かれたと言われており、ロマン派音楽の時代で最高のヴァイオリン協奏曲の一つとなった。1862年11月27日にサンクトペテルブルクにおいて、アントン・ルビンシテーイン指揮により、ヴィエニャフスキ自身によって初演された。そして、1870年の出版譜においては、親友のパブロ・デ・サラサーテへの献辞が書き込まれた。

第1楽章、アレグロ・モデラート、ニ短調、4分の4拍子、ソナタ形式。重々しく不安な第1主題と、抒情的な第2主題があり、その両方の要素がヴァイオリンによって、驚異的な装飾音として施されていく。第2楽章、ロマンス：アンダンテ・ノン・トロッポ、変ロ長調、8分の12拍子、三部形式。8分の12拍子のたゆたうような旋律に基づいている。中間部では印象的な山場が形成される。第3楽章、アレグロ・コン・フォーコーアレグロ・モデラート、ニ短調、4分の2拍子、ロンド形式。前楽章のヴァイオリンのカデンツァによって終楽章へと突入し、「ハンガリー風の」ジプシー様式による目まぐるしいロンドが始まる。第2主題にうつり、やがて独奏ヴァイオリンが長いトレモロを続けると、管弦楽器は第1主題を奏し、独奏楽器に渡される。こうしてニ長調になり、第3主題が奏され、そのままコーダとなる。

Profile

栃木県出身。12歳からヴァイオリンを始める。宇都宮短期大学附属高等学校音楽科を経て、洗足学園音楽大学弦楽器コースを卒業。これまでにヴァイオリンを川沼 文夫、星野 和夫、水野 佐知香の各氏に師事。オレグ・クリサ氏の特別レッスンを受講。ヴィオラを大野かおる、古川原 裕仁、安藤 裕子の各氏に師事。室内楽を水野 佐知香、羽川 真介、大野 かおるの各氏に師事。

5. 吉田 智海（コントラバス）

Pf. 今城 理恵

S.クーセヴィツキー ／ コントラバス協奏曲 嬰ヘ短調 作品3
Serge Koussevitzky (1874-1951) // Concerto for Double Bass in F sharp minor op.3

第1楽章　Allegro
第2楽章　Andante
第3楽章　Allegro

A.グラズノフ ／ 吟遊詩人の詩 作品71
Aleksandr Glazunov (1865-1936) // Chant du ménestrel op.71

【解説】

S.クーセヴィツキーはロシア出身のアメリカの指揮者、作曲家、コントラバス奏者である。指揮者としては1924年から25年間に渡り、ボストン交響楽団の指揮者を務めた。《コントラバス協奏曲》は、友人であるグリエールの力を借りて作曲し、1905年にモスクワにて本人自らの演奏で初演された。また、時代を超えて今日においても、コントラバス奏者にとって重要なレパートリーとなっている。

第1楽章は、アレグロ。冬のロシアの突き刺すような風を思わせる力強いモティーフから始まる。第2楽章は、アンダンテ。ロシア民謡的な甘美なメロディを朗々とコントラバスが歌い上げる。第3楽章は、アレグロ。第1楽章のモティーフの再現から始まり、徐々に畳みかけるような技巧的なパッセージへと変化していき、熱狂のなか音楽は終わりを迎える。

A.グラズノフは、20世紀初頭のロシア音楽において極めて重要な存在であり、その偉業の数を揚げれば枚挙にいとまがない。グラズノフの音楽は極めて保守的であった。しかし、激動の時代に確固たる権威と影響力を持ち続けた偉大な楽才であることは疑いの余地がない。《吟遊詩人の詩》は、1900年にチェロと管弦楽のために作曲され、1902年にペテルブルグにて初演された。今回は、コントラバスとピアノのために編曲されたものを演奏する。雄大なロシアの自然や大地を思わせるテーマ、それを彩る伴奏のチャイコフスキー的なオブリガート、明るいボロディン風の中間部、巧みな対旋律の書法によって伴奏とコントラバスで最後まで歌い上げられる。年老いた吟遊詩人が時を憂いて歌う姿が浮かび上がってくる。

Profile

神奈川県出身。順天堂大学国際教養学部国際教養学科異文化コミュニケーション領域卒業。13歳よりコントラバスを始める。横浜隼人高等学校在学中は吹奏楽部に在籍。在籍当時は演奏メンバーとして東関東吹奏楽コンクールへ3年間出場。これまでにコントラバスを今泉 文行、黒木 岩寿の各氏に師事。

6. 友原 安佐子（チェロ）

Pf. 西川 麻里子

E.グリーグ ／ チェロ・ソナタ イ短調 op.36より
Edvard Grieg (1843-1907) // Cello Sonata in A minor op.36

第1楽章　Allegro agitato
第3楽章　Allegro

【解説】

民族ロマン主義時代の重要なノルウェーの作曲家、エドヴァルド・グリーグ。当時最も優れた音楽学校と言われたライプツィヒ音楽院で学ぶが、ドイツ音楽は性に合わず模索を続け、やがてノルウェーの民謡のリズムとメロディーを取り入れたグリーグ独自のスタイルを確立していく。《チェロ・ソナタ》は1883年に書き上げられ、幼少からチェロを学びアマチュアながらもグリーグとたびたび共演した兄ヨーンに捧げられる。同年ドレスデンにてフリードリヒ・グリュッツマッヒャーのチェロと、作曲者自身のピアノによって初演される。

第1楽章、イ短調、2分の2拍子、ソナタ形式。暗さを秘め、急ぎ立てるような力強いイ短調の第1主題で始まり、北欧の広大な自然を彷彿させる緩やかで美しく抒情的な第2主題（第1主題の平行調のハ長調）に引き継がれる。展開部では、第2主題のピアノにチェロが対旋律を奏で、やがて第1主題に戻り再現部になる。同主調のイ長調に転調された第2主題が現れた後、コーダでもう一度チェロによるイ短調の第1主題が情熱的に発展し、プレスティッシモで締めくくられる。第3楽章、イ短調、4分の2拍子、序奏付きソナタ形式。独奏チェロによる序奏で始まり、ハリングと呼ばれるノルウェーの2拍子のアクロバティックな舞踊のリズムによるピアノに引き継がれる。活気を帯びてだんだんと動きが速くなり、突然に静かになるさまを繰り返し、コーダで曲趣を盛り上げ、和音の連続で全曲を閉じる。

ハリングのイメージをうまく表現できるように、舞踊の動画を見て研究した。聴いている方の脳裏に、ノルウェーの風景が浮かんでくれれば嬉しい。

Profile

鹿児島出身。鹿児島短期大学（現鹿児島国際大学）音楽科首席卒業（ピアノ専攻）。洗足学園アンサンブルアカデミーコースを経て、洗足学園音楽大学弦楽器コースチェロ専攻卒業。オタワ国際音楽コンクール声楽部門（ソプラノ）金賞受賞。チェロを木越 洋、鍋銀 久弥、小澤 豊の各氏に、室内楽を川田 知子、羽川 真介の各氏に師事。目黒区、世田谷区を中心に、子育てサロン、保育園等で演奏活動を行っている。

弦楽器
16:30

7. 有福 佑依（ヴァイオリン）

Pf. 横田 知佳

I.ストラヴィンスキー ／ イタリア組曲
Igor Stravinsky (1882-1971) // Suite Italienne

第1曲　序奏　Introduzione
第2曲　セレナータ　Serenata
第3曲　タランテラ　Tarantella
第4曲　ガヴォッタ・コン・ドゥエ・ヴァリアツィオーニ　Gavotta con due Variazioni
第5曲　スケルツィーノ　Scherzino
第6曲　ミヌエット・エ・フィナーレ　Minuetto e Finale

S.プロコフィエフ [L.バイチ、M.フレッツベルガー編曲] ／ 組曲《ロメオとジュリエット》
Sergei Prokofiev (1891-1953) [arr.Lidia Baich (b.1981) and Matthias Fletzberger (b.1965)] // Suite from Romeo and Juliet

第1曲　前奏曲　Introduction
第2曲　ジュリエット　Julia
第3曲　騎士たちの踊り　Tanz der Ritter
第4曲　バルコニーの情景　Balkonszene
第5曲　五組の踊り　Tanz der Paare
第6曲　マーキュシオ　Mercutio
第7曲　決闘とタイボルトの死　Kampf und Tybalts Tod

【解説】

《イタリア組曲》は、ストラヴィンスキーが1919年から1920年にかけて手がけたバレエ音楽《プルチネルラ》に基づく、ヴァイオリンとピアノのための作品である。《プルチネルラ》は、イタリア民話にある「人ちがいものがたり」をテーマにした作品で、うりふたつのプルチネルラとその親友のため、彼をそねんで殺そうとする恋仇が裏をかかれてしまうという喜劇である。バロック調でありながら、リズムやハーモニーが近代的であったりと、この頃ストラヴィンスキー独自の"新古典主義"に傾倒するきっかけとなった曲である。そして、1933年頃、ストラヴィンスキーの友人のヴァイオリニスト、サミュエル・デュシュキンと共同で、《プルチネルラ》をヴァイオリンとピアノのために編曲したものが《イタリア組曲》である。

《ロメオとジュリエット》は、プロコフィエフ のバレエ音楽で、シェイクスピアの悲劇に基づき1935年に作曲された。舞台は、14世紀イタリアの都市ヴェローナ。都市を代表する2つの名家、キャピュレット家とモンタギュー家は仇敵同士。キャピュレット家で開かれた仮面舞踏会にロメオが忍び込んだことで、ジュリエットに出会い、二人の恋愛は悲劇へと向かっていく。この作品には、常に控えめな明るさと情熱がありながらも、例えようのない悲しみが表現されている。今回演奏する組曲は、バレエ音楽《ロメオとジュリエット》の抜粋で、2012年のリディア・バイチとマティアス・フレッツベルガーによる編曲である。

Profile

東京都出身。洗足学園音楽大学弦楽器コースヴァイオリン専攻を卒業。これまでにヴァイオリンを故・益子 絢子、本多 菜穂子、堀越 みち子、沼田 園子の各氏に師事。また、ヴィオラを古川原 裕仁、須田 祥子の各氏に師事。室内楽を安永 徹、市野 あゆみ、小林 すぎ野、須田 祥子、古川原 裕仁、羽川 慎介、大野 かおる、川原 千真、安藤 裕子の各氏に師事。また、リチャード・ディーキン、オレグ・クリサ、ナムユン・キム、ヴィルフリート・シュトレーレ各氏の来日時に特別レッスンを受講。第7回、8回音楽大学オーケストラ・フェスティバルや、ラ・フォル・ジュルネ東京 2017及び 2018、学内の室内楽演奏オーディション合格による披露演奏会など、ヴァイオリン、ヴィオラで多数出演。

8. 林 桃子（ヴァイオリン）

Pf. 小林 裕子

J.ブラームス ／ ヴァイオリン協奏曲ニ長調 作品77
Johannes Brahms (1833-97) // Konzert für Violine und Orchester D-dur op.77

第1楽章　Allegro non troppo
第2楽章　Adagio
第3楽章　Allegro giocoso, ma non troppo vivace

【解説】

J.ブラームスは、1833年にドイツのハンブルクに生まれ、あらゆる分野ですぐれた数々の名曲を残した大作曲家である。ヴァイオリン協奏曲は、1878年にペルチャッハで作曲されたが、この時期は特にブラームスの作曲活動が盛んである。この協奏曲の作曲に大きな影響を与えたのが、ブラームスと長年に渡って親交のあったヴァイオリニストであるヨーゼフ・ヨアヒムである。ブラームスは演奏技巧的な面で、ヨアヒムに多くの助言を求め、ヨアヒムは、第1楽章のカデンツァも作曲している。初演は1879年1月1日にヨアヒムの独奏、ブラームスの指揮で行われた。

第1楽章、アレグロ・ノン・トロッポ、4分の3拍子、ソナタ形式。オーケストラの提示部で始まり、冒頭の主題を軸に展開される。長大な前奏を経て、ヴァイオリンの独奏がニ短調で登場する。第1主題は前奏で提示されたものを高音域で歌い、第2主題は、壮大なイ長調で柔和に奏でる。オーケストラのイ短調で始まる展開部を経て、再現部を終えたのち、カデンツァとなる。第2楽章、アダージョ、ヘ長調、4分の2拍子、3部形式。全体を通して劇的なところがなく、独奏ヴァイオリンは大らかに表情豊かな旋律を奏でる。どこか牧歌風で寂しさも感じる楽章である。ブラームスは、この楽章を「情けないアダージョ」と表現した。第3楽章、アレグロ・ジョコーソ・マ・ノン・トロッポ・ヴィヴァーチェ、4分の2拍子、ロンド・ソナタ形式。主題は、ハンガリーのジプシー風の色彩を持ち、ヨアヒムが作曲した《ハンガリー調の協奏曲》の影響があるとされている。軽快でユーモラスであり、開放的で情熱的な楽章である。

Profile

神奈川県出身。3歳よりヴァイオリンを始める。洗足学園中学高等学校卒業。洗足学園音楽大学弦楽器コースヴァイオリン専攻卒業。第31回全日本ジュニアクラシックコンクール第4位。第29回日本クラシック音楽コンクール大学生の部全国大会入選。リチャード・ディーキン、ナムユン・キム、オレグ・クリサ、フェデリコ・アゴスティーニの各氏来日時にレッスンを受講。第7回、8回音楽大学オーケストラ・フェスティバルに参加。これまでにヴァイオリンを堀越 みちこ、渡邉 ゆづき、ヴィオラを古川原 裕仁、安藤 裕子、室内楽を安永 徹、市野 あゆみ、羽川 真介、古川原 裕仁、大野 かおる、川原 千真の各氏に師事。

9. 山口 亜純（ヴァイオリン）

Pf. 田中 麻紀

J.シベリウス ／ ヴァイオリン協奏曲 ニ短調 作品47
Jean Sibelius (1865-1957) // Violin Concerto in D minor op.47

第1楽章　Allegro moderato
第2楽章　Adagio di molto
第3楽章　Allegro ma non troppo

【解説】

《ヴァイオリン協奏曲 ニ短調 》作品47は、1903年から1904年、シベリウスが38歳の頃の作品である。若い頃にヴァイオリニストを志し、ヴァイオリンという楽器を知り尽くした彼が唯一残した協奏曲作品である。

この曲には、初稿版と改訂稿（現行版）がある。初稿版を印刷する前の小さな修正が、細部に留まらずに構造の基礎に触れたため、全体を大幅に書き変えて現行版へと改訂することとなったのである。その要因としては、彼自身しか知り得ない内面的な理由があったものの、外的原因もいくつかあったといえる。1904年2月8日ヘルシンキでシベリウスの指揮、オトカル・ノヴァチェク（1866-1900）のヴァイオリン独奏で行われた初演では、全体を通して極めて演奏技術が難解であることから、演奏内容が聴き手の理解に困難なものであったという。また、この協奏曲に関して、この頃フィンランドの批評家カール・フロディンは特に手厳しく批判した。シベリウス自身が実際の現状よりもこうした批判を重く捉えていたことも関係しているだろう。初稿版から2年の歳月を経て1905年に完成した改訂版では、いくつかの超絶技巧的要素や音楽的モチーフは削除され、オーケストレーションにも変更が加わり、より重厚なサウンドを作り上げている。幻想的な独創性と、強く野生的な魅力の中に緻密さが際立つ、ヴァイオリンの魅力を最大限に引き出した傑作である。

今日では初稿版と現行版が一緒に収録された録音も発売されており、両者を聴くことができる。そのため、シベリウスの異なる音楽的モチーフや熱量を聴くことができ、大変興味深く面白い。

Profile

長野県出身。洗足学園音楽大学弦楽器コースヴァイオリン専攻を首席で卒業。学内コンサート『コンチェルトの夕べ』に大学、大学院共にソリストに選ばれ出演。第89回読売新人演奏会に出演。これまでにヴァイオリンを水野 佐知香、栗原 尚子、鈴木 由美、ヴィオラを大野 かおる、室内楽を水野 佐知香、羽川 真介、安藤 裕子、川原 千真の各氏に師事。2016年より安永 徹、市野 あゆみ両氏による特別講座を受講。また、オレグ・クリサ、ナムユン・キム、フェデリーコ・アゴスティーニ各氏来日時に師事すると共に、学内の数々のマスタークラスのレッスン講座を受講。在学中に、前田記念奨学生に認定。

クラシックギター
10:00

1. 大貫 淳也（クラシックギター）

M.ポンセ ／ ソナタ・ロマンティカ「シューベルトを讃えて」
Manuel Ponce (1882-1948) // Sonata romántica "Hommage à Fr. Schubert qui aimait la guitare"
第1楽章　Allegro moderato
第2楽章　Andante espressivo
第3楽章　Allegretto vivo
第4楽章　Allegro non troppo e serioso

【解説】
M.ポンセはメキシコの作曲家、音楽教師、ピアニストである。彼が1929年に発表した《ソナタ・ロマンティカ》は、フランツ・シューベルトに捧げられた作品で、その作風を偲ぶかのようにロマンティックな流儀を用いて作曲されている。
第1楽章、アレグロ・モデラート、イ長調、4分の4拍子。古典的なソナタ形式をとるが、たっぷりと歌う主題が充分に展開され甘美な趣を醸し出す。第2主題の3連符の連なりや、付点音符の多用にシューベルトらしさをよく研究したことが伺える。展開部は主に第2主題が使われていて、やがて第1主題のデフォルメされたものが、自然と再現部を導く構成となっている。第2楽章、アンダンテ・エスプレシーヴォ、ホ長調、4分の4拍子。コーダつきの3部形式であるが、ソナタ形式の変形とも見ることが出来る。たいそうロマンティックな歌の楽章で、ここでもシューベルトの癖をよくつかむと同時に、ポンセの特徴的な詩的抒情性が垣間見える。第3楽章、アレグレット・ヴィーヴォ、ホ短調、2分の2拍子。シューベルトの《即興曲》あるいは《楽興の時》をまねたような、軽妙さの中に哀愁が伺える間奏曲である。3部形式で中間部はホ長調となり抒情的である。第4楽章、アレグロ・ノン・トロッポ・エ・セリオーソ、イ短調、4分の4拍子。明確な主題を2つ持つが、ソナタ形式にはこだわらず、調の流れも自由に組み立てられている。ギターの性格を生かしたアルペジオがめざましく、また結び近くの全ての弦を用いた和音の連なりは印象的であり、堂々としたクライマックスを形作る。

Profile
埼玉県出身。埼玉県立川越高校、首都大学東京 航空宇宙システム工学コースを卒業。高校、大学にてギター合奏を行い、18歳より独奏を始める。これまでに、小林 徹、原 善伸、鈴木 大介、大萩 康司の各氏に師事。

2. YAN SHI（クラシックギター）★

M.カルカッシ ／ 25のエチュード 作品60より
Matteo Carcassi (1792-1853) // 25 Etudes op.60
第18番　No.18

F.ソル ／ マールボロ変奏曲
Fernando Sor (1778-1839) // Introduction et variations l'air : Malbroug

M.リョベート ／ 聖母の子
Miguel Liobet (1878-1938) // El Noi de la Mare

J.S.バッハ ／ 無伴奏フルートのためのパルティータ イ短調 BWV.1013より
Johann Sebastian Bach (1685-1750) // Partita in A minor BWV.1013
アルマンド　Allemande

【解説】
カルカッシの《25のエチュード 》作品60は、彼の《教則本》作品59の延長線上にあり、クラシックギターの"基本的な奏法"を、技術と音楽の両面から習得する上で最適な教材である。
ソルの《マールボロ変奏曲》は1827年に発表された作品であり、《マールボロは戦場に行った(Malbrough s'en va-t-en guerre)》というフランス民謡を基に、5つの魅力的な変奏で表した名曲である。英語圏では「熊は山の彼方から来る(The Bear Came Over The Mountain)」という歌詞でも知られている。マールボロは、スペイン継承戦争における実在したイギリス軍の英雄ジョン·チャーチル·マールボロ公のことを指している。また、ベートーヴェンも《ウェリントンの勝利》作品91において、フランス軍を表すために《マールボロ変奏曲》と同じテーマを使っている。
リョベートの《聖母の子》はカタルーニャ民謡を編曲し、イエス・キリストに捧げた代表的な作品である。
バッハの《無伴奏フルートのためのパルティータ》は1722-23年に完成されたフルートソロのための組曲である。この組曲は〈アルマンド〉、〈クーラント〉、〈サラバンド〉、〈ブーレ・アングレーゼ〉という4つの舞曲楽章で構成されており、バッハ作品の中で唯一の無伴奏フルート組曲である。そのなかでも、本日は〈アルマンド〉を演奏する。

Profile
中国甘粛省出身。2010年から中国甘粛省でLI MAOYU氏にクラシックギターを学び、2013年から西安音楽学院教授の遠藤 洋介氏に師事する。現在は、原 善伸氏に師事してクラシック演奏法を学ぶ。

3. HEI SHENGYU（クラシックギター）★

D.スカルラッティ ／ ソナタ K.322 L.483
Domenico Scarlatti (1685-1757) // Sonata K.322 L.483

J.L.メルリン ／ 思い出の組曲
José Luis Merlin (b.1952) // Suite del Recuerdo
第1楽章　Evocacion（エボカシオン）
第2楽章　Zamba（サンバ）
第3楽章　Chacarera（チャカレーラ）
第4楽章　Carnavalito（カルナバリート）
第5楽章　Evocacion（エボカシオン）
第6楽章　Joropo（ホローポ）

F.ソル ／ モーツァルトの「魔笛」の主題による序奏と変奏曲 作品9
Fernando Sor (1778-1838) // Introduction and Variations on a Theme by Mozart op.9

【解説】
ドメニコ・スカルラッティの《ソナタ》K.332 L.483は、ゆったりとした、明るく自由なイタリア民族の風格を持った叙情的な小曲である。素朴でなめらかなリズムと伸びやかなメロディーが、主題となる楽観的な精神を伝える。第36小節と第74小節の旋律は、穏やかで親しみやすい雰囲気を漂わせている。
アルゼンチンのギタリスト・作曲家であるホセ・ルイス・メルリンの《思い出の組曲》は、哀愁を帯びた音楽である。〈エボカシオン〉〈サンバ〉〈チャカレーラ〉〈カルナバリート〉〈エボカシオン〉〈ホローポ〉という全6楽章で構成されており、アルゼンチンをはじめとする南米地域の様々な民族音楽のジャンルを用いて、南米の故郷への懐かしさを表現している。
フェルナンド・ソルの《モーツァルトの「魔笛」の主題による序奏と変奏曲》作品9は、スペインの著名なギタリストで作曲家でもあるソルが、モーツァルトのオペラ《魔笛》の第1幕が終わる直前に歌われる曲、すなわちに「光明の国」の支配者であるザラストロの神殿でのムーア人モノスタトスと二人の奴隷の重唱に基づいて作曲した作品である。ソルはこの曲をとても気に入っており、ギターで演奏するために、入念に編曲を行った。

Profile
中国甘粛省出身。15歳からクラシックギターを学び、2014年西北師範大学音楽学院クラシックギター学科に入学。2016年より西安音楽学院の遠藤 洋介氏に師事。2017年泰嶺国際ギターフェスティヴァル青年グループ第4位を獲得。現在、原 善伸氏に師事。

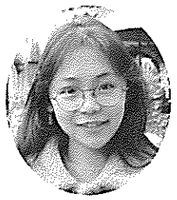
和楽器
12:30

4. WU SHNAGMEIYUE（箏）

尺八 青木 鈴慕

菊城 正明 (ca.1925-70) ／ 組曲《四季》
第1楽章　陽春
第4楽章　雪の幻想
宮城 道雄 (1894-1956) ／ 春の海
吉崎 克彦 (b.1954) ／ 風に聞け PartⅡ

【解説】
菊城正明の組曲《四季》は四季における変化、それも記憶に残る美しい景色を表現している。第1楽章〈陽春〉。三月に万物が蘇る。暖かい陽光が大地に降り注ぎ、喜びの気持ちが胸に躍り、人々は新しい一年を始める。しかしこれらの美しい景色に対して人々が抱く心境は様々だ。第4楽章〈雪の幻想〉。雪がちらちらと降る季節、心の中のいくつかの追憶は突然現れて、人に幸せな楽しい追憶を起こさせる。心の中では、旧年の名残や悔しさと同様に新たな年に対する期待がある。そして最終的にはこれらは雪の中で静かにおさまっていく。
《春の海》は宮城道雄が1929年に作曲した箏と尺八による二重奏曲。春の海の様子がかもめの鳴き声などを描写していて、おだやかな春の日ざしをあびた静かな海の風景が、眼の前に浮かんでくるようだ。宮城が瀬戸内海を旅行したおりに、春には美しい桃の花が咲乱れるという島の人々の会話を耳にし、こうした情景を思いうかべて、この曲をつくったともいわれている。 新しい邦楽を代表する楽曲である。
吉崎克彦の《風に聞け Part Ⅱ》は風が起こす心のさざ波を描いた箏独奏の為の無言歌である。風の強さや弱さを借りて、人の気持ちの起伏を表現する。悩みや喜びは風によって生じ、風によって落ちる。



Profile
中国陝西省出身。3歳より中国民族舞踊、5歳よりピアノ、8歳より中国箏をそれぞれ習い始める。漢台高等学校音楽科を経て、西安工程大学国際経済貿易学科卒業。2015年度、中国大学生芸術コンクール銀賞。2016年7月来日、2017年から生け花と伝統文化を、2018年から日本箏を習い始める。吉原 佐知子、野澤 佐保子、市川 香里、鳥越 菜々子、李 明姫、劉 墨涵の各氏に師事。

声楽
14:00

5. 板倉 春菜（ソプラノ）

Pf. 森田 真帆

G.フォーレ ／ 歌曲集《優しい歌》
Gabriel Fauré (1845-1924) // La bonne chanson
第1曲　後光に包まれた聖女　Une sainte en son auréole
第2曲　あけぼのが広がっているから　Puisque l'aube grandit
第3曲　白い月が森にさし込み　La lune blanche luit dans les bois
第4曲　僕は不実の道を歩いていた　J'allais par des chemins perfides
第5曲　本当は僕は怖いくらいだ　J'ai presque peur, en vérité
第6曲　おまえが消え去る前に　Avant que tu ne t'en ailles
第7曲　さて、それは明るい夏の日のことだ　Donc, ce sera par un clair jour d'été
第8曲　ねえ、そうだろう　N'est-ce pas?
第9曲　冬は終わった　L'hiver a cessé

【解説】
《優しい歌》は、ヴェルレーヌの詩からフォーレが9つ選んで構成した連作歌曲集である。〈後光に包まれた聖女〉ヴェルレーヌの婚約者の名から連想させる光景を列挙しており、音楽では遠い森から角笛の輝かしい音色が聞こえてくる。〈あけぼのが広がっているから〉高揚した希望、何事をも乗り越えようとする決意、愛する人と道を歩んでいく幸せの異なった叙情的な詩が音楽的に表現されている。〈白い月が森にさし込み〉月の光というありふれた題材に、ヴェルレーヌは美しい詩を生み、フォーレは作曲でその詩に命を吹き込んだ。詩人は夜の風景を描写し、また恋人へ愛を呼びかける。〈僕は不実の道を歩いていた〉ごつごつしたリズムのピアノによる主題と滑らかに上昇していく音階との差によって、過去の暗い記憶と現在の喜びとの変化を明確にしている。〈本当は僕は怖いくらいだ〉幸福と喜びが満ち溢れすぎることからくる恐れが、ピアノ部分のシンコペーションによって表現されている。〈おまえが消え去る前に〉夜明け前に愛する人の夢の中へ思いを届くようにという願いと、情景を表す感情の比喩表現によって構成されている。〈さて、それは明るい夏の日のことだ〉ある夏の太陽を感じさせる明るい婚礼の日の歌である。リタルダンドが、婚礼の日の夕ぐれの希望に満ちた気分へと導いていく。〈ねえ、そうだろう〉平和と確信に満ちた幸福が表現されている。この曲の速度が、手を取り合って楽しげに人生をゆっくりと歩む恋人たちを暗示している。〈冬は終わった〉一年中、心の中に春を持ち続けていて、幸福のさまざまな表現による音楽主題が再現されている。最後に情愛と幸福に対する感謝の念を注ぎ込んでいる。

Profile
静岡県出身。浜松学芸高等学校、国立音楽大学音楽学部演奏・創作学科声楽専攻卒業。国立音楽大学静岡県同調会西部支部新人演奏会出演。秋山 理恵氏に師事。

6. 壽美 玲子（ソプラノ）

Pf. 坂元 陽子

高木 東六 (1904-2006) ／ かもめ
弘田 龍太郎 (1892-1952) ／ 狐のお使い
藤井 清水 (1889-1944) ／ 信田の藪
山田 耕筰 (1886-1965) ／《芥子粒夫人》より
第1部
第4部
G.ドニゼッティ ／ 歌劇《アンナ・ボレーナ》より
Gaetano Donizetti (1797-1848) // Anna Bolena
あなたたち泣いているの？～私の生まれたあのお城　Piangete voi?...Al dolce guidami castel natio

【解説】
《かもめ》、《狐のお使い》、《信田の藪》とも、野口雨情の詩による歌である。《かもめ》は、俚謡風な詩に歌部分が5音音階で作られ、民謡風な感じを彷彿とさせる曲である。《狐のお使い》は、1930（昭和5）年『コドモノクニ』5月号に発表されたもので、原詩は全てカタカナで書かれている。《信田の藪》は、いつもお背戸の藪に来てとまる赤とんぼに「葛の葉子別れ」伝説のかわいそうな話をしてあげよう、という子どもの優しい気持ちを歌ったもの。
《芥子粒夫人》（ポストマニ）は、北原白秋がインドのけしの花にまつわる伝説に基づいて、4篇の物語的な童謡詩に仕立てたもの。山田耕筰はそれを長大なバラードの形で、物語の展開を暗示しながらリードしていくピアノ伴奏と当時としてはあらゆる声楽的表現を駆使し、見事に演出された音楽劇を見ているような芸術歌曲にした。二度の嬰変化と六度の変変化を多用し、エキゾチックな童話的世界にふさわしい音楽的表現を生み出している。
歌劇《アンナ・ボレーナ》は、《マリア・ストゥアルダ》《ロベルト・デヴェリュー》と並んでドニゼッティの「チューダー朝三部作」として知られている。1830年に初演されたこのオペラは、16世紀のイギリス、ウィンザー城で起きた史実である。イングランド王妃アンナ・ボレーナは、昔の恋人パーシー卿と再会したが、それは侍女ジョヴァンナを次の王妃にするための王のエンリーコの企みだった。牢獄に監禁されたアンナは悲しみのあまり錯乱し、新王妃誕生の報を聞きながら息を引き取る。〈私の生まれたあのお城〉は、死罪が決定したアンナが錯乱状態に陥り、美しい過去を思い出し歌うアリアである。

Profile
茨城県出身。桐朋学園大学音楽学部演奏学科声楽専攻卒業。同大学声楽研究科修了。アクト青山ドラマティックスクールにおいて演劇を学ぶ。現在、近畿大学・九州短期大学、龍馬看護ふくし専門学校、各声楽非常勤講師。オペラ、コンサートなど多数出演し、近年は弘田龍太郎と野口雨情の研究を進め、童謡や日本の歌を歌い継ぐ活動を続けている。毎年、野口雨情作詞の童謡《青い眼の人形》を通して日米親善と童謡の講演、演奏を行う一方、海外においては《青い眼の人形》の日本語による歌唱指導と演奏をしている。二期会会員。柳澤 涼子氏に師事。

7. 原 芽衣（ソプラノ）

Pf. 牧 華子

中田 喜直 (1923-2000) ／ 歌曲集《マチネ・ポエティクによる四つの歌曲》より
第2曲　さくら横ちょう

橋本 國彦 (1904-49) ／ お菓子と娘

小林 秀雄 (1902-83) ／ すてきな春に

G.ヴェルディ ／ 歌劇《仮面舞踏会》より
Giuseppe Verdi (1813-1901) // Un ballo in maschera
輝く星をご覧なさい　Volta la terrea fronte stelle
知っているが言えない　Saper voreste di che si veste

G.ヴェルディ ／ 歌劇《ファルスタッフ》より
Giuseppe Verdi // Falstaff
そよ風にのって妖怪たちが　Sul fil dun soffio etesio

G.ヴェルディ ／ 歌劇《リゴレット》より
Giuseppe Verdi // Rigoletto
慕わしい人の名は　Caro nome

Profile

東京都葛飾区出身。 洗足学園音楽大学声楽コース卒業。 これまで、境ゼミオペラ公演《魔笛》夜の女王役、黒い薔薇歌劇団《魔笛》童子１役、すみだオペラ《魔笛》パパゲーナ役、2019年SENZOKU OPERA《ヘンゼルとグレーテル》グレーテル役で出演。 声楽を宮部 小牧、砂田 恵美、鞠木 絵里の各氏に師事。

【解説】

〈さくら横ちょう〉は、《マチネ・ポエティクによる四つの歌曲》の2曲目。五・七調のソネット式で「と」「う」で韻を踏ませている。満開の桜の中での過ぎ去った恋を歌っている。

《お菓子と娘》で描かれるのは、公園を散歩するパリの娘たち。当時では考えられない、明るく自由な姿への驚きと、興味、そしてパリ娘への好意が詩となった。

《すてきな春に》では、春とともにおとずれた恋の思いと、愛することの喜びを高らかに歌い上げている。

《仮面舞踏会》第1幕では、人の心を惑わせる占い師ウルリカの追放を求めるが、彼女と仲のいいオスカルが〈輝く星をご覧なさい〉を歌ってウルリカを弁護する。同3幕では、仮面舞踏会の会場で暗殺者たちが身を隠して参加する中、オスカルがリッカルドの変装を見抜く。レナートはオスカルに「リッカルドはどのような変装をしている?」と尋ねるが、オスカルはそれに答えず、〈知っているが言えない〉を歌う。

《ファルスタッフ》第3幕。ファルスタッフが猟師姿で現れ、真夜中の12時の鐘が鳴る。アリーチェも登場し逢引を始めるが、すぐにメグが「助けて、悪魔がくる!」と割って入ってくる。妖精の女王に変装したナンネッタが〈そよ風にのって妖怪たちが〉を歌う。

《リゴレット》第1幕。生まれて初めて恋をしたジルダは、〈慕わしい人の名は〉で、「グアルティエ・マルデ…」と名前を呼び、そのときめきを歌う。

声楽
15:20

8. 池田 実来（ソプラノ）

Pf. 前田 孝子

山田 耕筰 (1886-1965) ／ 野薔薇

山田 耕筰 ／ 薔薇の花に心を込めて

山田 耕筰 ／ この道

V.ベッリーニ ／ 歌曲集《6つのアリエッタ》より
Vincenzo Bellini (1801-35) // Sei Arietta
第2曲　お行き、幸運なバラよ　Vanne, o rosa fortunata
第3曲　美しいニーチェよ　Bella Nice, che d'amore
第6曲　喜ばせてあげて　Ma rendi pur contento

V.ベッリーニ ／ 歌劇《夢遊病の女》より
Vincenzo Bellini // La Sonnambula
親愛なる皆さん～気も晴れ晴れと　Care compagne...Come per me sereno

Profile

静岡県出身。玉川大学芸術学部パフォーミング・アーツ学科を卒業。これまでに声楽を扇淵 真理、馬場 眞二、沢崎 恵美の各氏に師事。2019年にオーディション合格者による、第13回みんなのクラシックコンサート、八王子イタリア・オペラ合唱団 結成記念コンサートにソリストとして出演。また武蔵野合唱団に所属し、ベートーヴェン《交響曲第９番》やヴェルディ《レクイエム》など、様々なコンサートに出演。

【解説】

《野薔薇》は1917年に作曲され、人知れず咲く可憐な野薔薇に宇宙の摂理、自然の恵みを知り、神の御言葉に背くことなく神への感謝を捧げて歌ったものである。

《薔薇の花に心をこめて》は1959年に歌曲としては最後に作曲された曲である。中世ヨーロッパでは「薔薇」は聖母マリアの象徴とされ、「薔薇」を神として讃美と感謝を込めて歌われたものである。

《この道》は北原白秋が壮年期に訪れた北海道の景色と生まれ故郷の熊本県の景色など、今まで歩んできた人生の過程を道として情感深く表現した曲である。

《6つのアリエッタ》はベッリーニによって1828年頃に作曲された6つの歌曲である。音が極めて美しく、純粋な響きと気品に満ちた情緒ある作品集である。〈お行き、幸運なバラよ〉は愛する人の傍に佇む薔薇に嫉妬し、恋焦がれた気持ちを歌っている。〈美しいニーチェよ〉はニーチェへの熱烈な愛を歌っている。少し陰りを帯びた旋律がニーチェへの愛の深さを思い起こさせる。〈喜ばせてあげて〉は自分の心が幸せでなくとも、愛する人の心を喜ばせたいと願う、健気で素直な気持ちを歌っている。

歌劇《夢遊病の女》は1831年に作曲されたベッリーニの代表作である。19世紀初め、スイスのとある村を舞台に愛しい恋人エルヴィーノとの婚約に胸を踊らせるアミーナが夢遊病によって誤解を招き破談にされてしまう。しかし領主の協力もあって誤解が解け、無事2人は結婚する。〈親愛なる皆さん～気も晴れ晴れと〉はアミーナのアリア。エルヴィーノとの婚約を祝福してくれた養母テレサや村人に感謝を捧げ、結婚する喜びを歌っている。

9. ZHANG HAN（テノール）

Pf. ZHANG FAN

S.ドナウディ ／ 私の愛する人
Stefano Donaudy (1879-1925) // O del mio amato ben

G.フォーレ ／ リディア
Gabriel Fauré (1845-1924) // Lydia

G.フォーレ ／ この世では
Gabriel Fauré // Ici-bas

G.フォーレ ／ 河のほとりで
Gabriel Fauré // Au bord de l'eau

G.フォーレ ／ 愛の唄
Gabriel Fauré // Chanson d'amour

G.フォーレ ／ 夢のあとに
Gabriel Fauré // Après un rêve

G.ドニゼッティ ／ 歌劇《愛の妙薬》より
Gaetano Donizetti (1797-1848) // L'elisir d'amore
なんと彼女は美しい　Quanto è bella
人知れぬ涙　Una furtiva lagrima

Profile

中国の陝西省安康市出身。咸陽師範大学音楽学院音楽教育コース声楽専攻卒業。張 殿斌、朱 博、王 艶の各氏に師事。現在、田 大成氏に師事。

【解説】

〈なんと彼女は美しい〉はドニゼッティの歌劇《愛の妙薬》の第1幕第1場で、村の純朴な若者ネモリーノが本に読みふけっている女地主アディーナを眺めながら、その美しさを称え、自分には彼女への愛を打ち明けることができないと嘆いて歌っている。〈人知れぬ涙〉は第2幕より。ネモリーノはアディーナの愛を得るため、再び愛の薬を買おうとするが、金を持っていなかった。そこで、薬を買う金のために、軍隊に入ることを決心する。それを知ったアデイーナは感動のあまり目に涙を浮かべる。その姿を見たネモリーノは自分の愛の勝利を確信して、この叙情美に溢れるアリアを歌う。

《私の愛する人》はイタリアの作曲家ステーファノ・ドナウディが作曲した作品。簡単な言葉を通して、意中の人に対する自分の愛慕の気持ちを表現する歌曲である。

ガブリエル・フォーレはフランス歌曲の代表的な作曲家である。《リディア》はルコント・ド=リルの詩に作曲した作品。リディアという女性を讃えている。《この世では》は、シュリュ=プリュドムの詩による作品。静かな悲しみをたたえた中にほんのりと憧れを漂わせるところが、永遠に続く愛を、そして幸せを夢見ているように感じさせる。作曲家の前向きな人生態度を表現する。《河のほとりで》は、シュリュ=プリュドムの詩による作品。幸せに浸っている恋人たちの情景である。《愛の唄》は、シルヴェストル・アルマンの詩による作品。18世紀のロマンスと組み合わせた美学創作意識で恋愛を表現した歌曲である。《夢のあとに》は、ビュシーヌの詩による作品。夢うつつの中でふと見えた恋しい人の姿を描いている。

木管楽器
10:40

1. 持田 夏希（オーボエ）

Pf. 星野 苗緒

B.ブリテン ／ 世俗的変奏曲
Benjamin Britten (1913-76) // Temporal Variations
第1曲　Theme
第2曲　Oration（式辞）
第3曲　March（行進曲）
第4曲　Exercises（訓練）
第5曲　Commination（威嚇）
第6曲　Chorale（コラール）
第7曲　Walz（ワルツ）
第8曲　Polka（ポルカ）
第9曲　Resolution（決断）

篠原 眞 (b.1931) ／ Obsession (執念)

Profile

神奈川県出身。洗足学園音楽大学管楽器コースオーボエ専攻卒業。13歳よりオーボエを始める。フィリップ・トーンドゥル氏のマスタークラスを受講。これまでにオーボエを佐藤 亮一、辻 功の各氏に師事、室内楽を菅井 春恵、辻 功の各氏に師事。

【解説】

《世俗的変奏曲》は、1936年にベンジャミン・ブリテンによって作曲された。後に《ピーター・グライムズ》の台本を執筆するモンタギュー・スレイターに献呈されている。成立背景は明確になっていないが、第二次世界大戦を直前にした当時の情勢は、この作品にも影響を及ぼしているだろう。この曲は、〈ITheme〉で提示されるオーボエとピアノのモチーフが印象的な主題から始まる。〈Ⅱ Oration〉はドラマチックな性格で発展的ではあるが、主題の変奏が所々に見られる。〈Ⅲ March〉は活発で風刺的な行進曲である。〈Ⅳ Exercises〉では双方に技巧を要求するパッセージやトリルが連続し、続く〈Ⅴ Commination〉で主題が再起する。〈Ⅵ Chorale〉はピアノの厳かな和音の間に、オーボエが悲しむかのごとく1音だけを奏でていて聴くものの心を打つ。〈Ⅶ Walz〉では不安げに揺れ動く旋律が展開していき、ピアノも複雑さを増していく。陽気な〈Ⅷ Polka〉へと続き、最後の〈ⅨResolution〉では一定間隔で打ちつけるピアノの上を、オーボエは主題で提示されたCisとDのモチーフを続けて奏でる。

《Obsession》は篠原眞が1960年にパリ国立音楽院オーボエ科試験のために作曲した作品。オーボエによる持続音に半音階の短い音群が散らばる序奏に始まり、ゆったりとした旋律進行の半音のモチーフが装飾的に現れる。次第に運動性豊かな旋律に変化していき、再び序奏の楽想に戻る。篠原自身が「執念」と訳したように、オーボエのモチーフが変化し増大しながら執拗に繰り返されている様が印象的である。

2. 尾崎 ゆか（フルート）

Pf. 松井 洋子

C.ドビュッシー ／ 牧神の午後への前奏曲
Claude Debussy (1862-1918) // Prélude à "L'après-midi d'un faune"

武満 徹 (1930-96) ／ エア

S.カーク=エラート ／ フルート・ソナタ 変ロ長調 作品121
Sigfrid Karg-Elert (1877-1933) // Sonate für Flöte und Klavier B-dur op.121

第1楽章　Allegro amabile
第2楽章　Adagissimo
第3楽章　Sehr geschwind und leichthin（とても速く、軽快に）

【解説】

《牧神の午後への前奏曲》はドビュッシーが1892～94年に作曲した管弦楽曲であり、初期の代表作である。作曲の際に着想を得たステファヌ・マラルメの詩「牧神の午後」はおよそ次のような内容である。夏の昼下がりに、森の中で目覚めた牧神は2人のニンフの夢想にふける。その柔肌に恋い焦がれかき抱こうとするがニンフは逃げてしまい、思いを果たせず、再び身を横たえまどろみに落ちていく。この曲によってドビュッシー独自の様式が確立したと言われている。

武満徹は1930年に音楽とは無縁な両親のもとに生まれるが、第2次世界大戦中に聞いたシャンソンに衝撃を受け作曲家を志す。戦後は主に独学で作曲を学び、電子音楽や映画音楽など様々なジャンルの作品を残している。武満徹の遺作となった《エア》はフルート奏者オーレル・ニコレの70歳記念コンサートの為に作曲され、ニコレに献呈された。タイトルは「空気」と「歌」の掛詞となっている。冒頭の主題が変容し「空気」の中で姿を現しては消えることを繰り返す。作曲者自身が語った「始まりも終わりもない、永遠に続く音楽の一部」であり、それを切り取ったものが「歌」となりフルートで語られていく。

S.カーク=エラートはドイツ後期ロマン派の作曲家兼オルガニスト。今回演奏する《フルート・ソナタ》は、3つの楽章が切れ目なく演奏され、第1楽章は牧歌的なメロディーと軽快なスタッカートの主題で展開される。第2楽章はゆっくりと音楽が進むにつれて感情が高ぶり白熱していき、最後は穏やかに主題が奏でられる。最終楽章は第2楽章から一転して勢いよく進み、ピアノと激しい応酬を繰り広げながらクライマックスへと向かう。

Profile

神奈川県出身。昭和音楽大学管楽器コース器楽学科卒業。これまでにフルートを菅原 潤、太田 嘉子、菅井 春恵、吉田 祐美の各氏に師事。フィリップ・ペルノルド氏のマスタークラスを受講。ドイツ、ハンブルク国際音楽講習会にてスザンネ・バーナー、マーク・ソボレフスキー各氏のマスタークラスを、ライプツィヒにてイルメラ・ボスラー氏のプライベートレッスンを受講。第７回横浜国際音楽コンクール管楽器部門高校の部第３位。第３回Ｋフルートコンクール大学・一般の部優秀賞。

木管楽器
11:55

3. YU QINZI（サクソフォーン）

Pf. 原田 愛

P.クレストン ／ アルト・サクソフォーンとオーケストラのための協奏曲
Paul Creston (1906-85) // Concerto for Alto Saxophone and Orchestra

第1楽章　Energetic（エネルギッシュに）
第2楽章　Meditative（瞑想的に）
第3楽章　Rhythmic（リズミカルに）

【解説】

ポール・クレストンはアメリカの作曲家、オルガニスト。本名はジュゼッペ・グッドヴェッジョ (Giuseppe Guttoveggio)。イタリア系移民の家庭に生まれ、教師として、作曲家のジョン・コリリアーノ (John Corigliano b.1938) らを教えた。作風としてはかなり保守的な傾向が見られ、様式においては自由だが調性的でリズムの要素が強い。作品のいくつかは、ウォルト・ホイットマンの詩に触発されている。リズムに対する造形が深く、リズムとその記譜法に関しての理論書も書いている。

《アルト・サクソフォーンとオーケストラのための協奏曲》は、クレストンの主要な作品の1つと見なされている。吹奏楽版でも知られているが、もともとオーケストラのために書かれ、1944年にニューヨーク・フィルハーモニックとヴィンセント・アバトの独奏で初演されている。全3楽章で構成され、第1楽章（エネルギッシュに）と第3楽章（リズミカルに）におけるソロの名人芸的なパッセージが特徴的で、「できるだけ速く」と記されたカデンツァで終わる。サクソフォーンならではのカンタービレは第2楽章（瞑想的に）で最大限に活用され、印象派音楽にインスパイアされたハーモニーが組み合わさって、夢のような雰囲気を作り出している。なお本日はピアノ版による演奏である。

Profile

中国青島生まれ。11 歳からサクソフォーンの勉強を始め，2013 年に中国海洋大学芸術学科のサクソフォーン専攻に合格、蓋 斌氏に師事。その間、中国海洋大学のサクソフォーン「風」管楽団の首席を務めた。2016 年、青島コンサートホールでソロコンサートを開催。2017 年に大学を卒業し、日本に留学。現在、池上 政人氏に師事。

4. 伊藤 仁美（クラリネット）

Pf. 鈴木 由紀子

A.ベルク ／ 4つの小品 作品5
Alban Berg (1885-1935) // 4 Stücke für Klarinette und Klavier op.5

第1曲　Mäßig（中庸の速度で）
第2曲　Sehr langsam（きわめて遅く）
第3曲　Sehr rasch（きわめて速く）
第4曲　Langsam（遅く）

J.ブラームス ／ クラリネット・ソナタ 第1番 ヘ短調 作品120-1
Johannes Brahms (1833-97) // Sonate für Klarinette und Klavier f-moll op.120-1

第1楽章　Allegro appassionato
第2楽章　Andante un poco adagio
第3楽章　Allegretto grazioso
第4楽章　Vivace

【解説】

アルバン・ベルクの《4つの小品》は、クラリネットのための20世紀に書かれた名作としてよく取り上げられる。作曲は1913年。非常に短い曲が集められ、アフォリスティック（警句的）な特徴を持ち、シェーンベルクの言葉によると「一大小説をたった1つの身振りで表現する」作品であり、同時に古典的な形式の4楽章のソナタと考えることができないわけではないという指摘がある。第1曲全18小節、第2曲全9小節、第3曲全18小節、第4曲全20小節から成る。

ブラームスの2つの《クラリネット・ソナタ》作品120は彼の最後の室内楽曲である。老いや孤独、作曲家としての衰えを感じて一度は大作の作曲をやめる決意をしたが、彼に再び作曲に向かうエネルギー、インスピレーションを与えたのは、マイニンゲン宮廷管弦楽団のクラリネット名手、R.ミュールフェルトであった。やがて、三重奏曲、五重奏曲、ソナタの順にクラリネットを含む4曲の室内楽曲が生み出され、古典派に立脚した自身の芸術に深い奥行きを与える作品群として、作曲家晩年の創作の到達点となった。1894年に作曲された作品120は1番と2番の枝番となっており、いずれも晩年の抒情が丹念に織り込まれている。その第1番は第1楽章 ソナタ形式。熱のこもったピアノのユニゾンから始まり劇的な展開を見せる。第2楽章 三部形式。クラリネットがのびやかに歌う。第3楽章三部形式。レントラー風の穏やかな間奏曲。短調で下行する長いシンコペーションから、ブラームスの訴えが聞こえてくるようである。第4楽章 ロンド形式。悲しみの中に見出した慰めであろう。快活なフィナーレで締め括る。

Profile

北海道出身。日本女子大学卒業。2016 年 ABRSM 英国王立音楽検定クラリネットでディプロマの学位を取得。第 21 回（2020 年）大阪国際音楽コンクール入選。第 17 回長江杯国際音楽コンクール 3 位。これまで渡部 大三郎、千葉 直師、坂口 雅教、白川 毅夫の各氏に師事。2017 年と 2019 年の草津国際音楽アカデミーで四戸 世紀氏のマスタークラスを受講。現在、大浦 綾子、松本 健司の各氏に師事。室内楽を大浦 綾子氏に師事。

木管楽器
14:00

5. 前原 希美（フルート）

Pf. 井上 友美

B.バルトーク［P.アルマ編曲］／ ハンガリー農民組曲
Béla Bartók (1881-1945) [arr. Paul Arma (1905-87)] // Suite paysanne hongroise
悲しい民謡　Chants populaires tristes
第1曲　Rubato
第2曲　Andante
第3曲　Poco rubato
第4曲　Andante
スケルツォ　Scherzo
古い踊り　Vielles danses
第1曲　Allegro
第2曲　Allegretto
第3曲　Allegretto
第4曲　L'istesso tempo
第5曲　Assai moderato
第6曲　Allegretto
第7曲　Poco piu vivo
第8曲　Allegro
第9曲　Allegro

L.ライタ ／ 演奏会用ソナタ 作品64
László Lajtha (1892-1963) // Sonate en concert op.64
第1楽章　Entrée avec deux cadences（2つのカデンツァを伴った導入）
第2楽章　Berceuse nostalgique（ノスタルジックな子守唄）
第3楽章　Menuet mélancolique（メランコリックなメヌエット）
第4楽章　Final gai（陽気な楽章）

Profile

神奈川県出身。15 歳よりフルートを始める。洗足学園音楽大学管楽器コースを卒業。第 34 回かながわ音楽コンクール　フルート部門　一般の部入選。ユルゲン・フランツ、マルク・グローウェルス、フィリップ・ベルノルド、各氏のマスタークラスを受講。フルートを酒井 秀明、菅井 春恵、岩崎 紗佳の各氏に師事。室内楽を石田 多紀乃、星野 均、山根 公男の各氏に師事。

【解説】

B.バルトークはハンガリー生まれの作曲家、民族音楽学者、ピアニスト。バルトークは自らハンガリー民俗音楽の研究を行ない、人々にこのジャンルに対する深い関心を喚起するうえで多大な貢献を果たした。彼の音楽は特にハンガリーとルーマニアの農民文化に深く影響を受けていると考えられる。

《ハンガリー農民組曲》はバルトークが1914年～1918年に書いたピアノ独奏曲《15のハンガリー農民歌》をバルトークの没後に、彼の門弟P.アルマが、フルートとピアノのための作品に編曲したもの。民謡からの編曲作品であるピアノ独奏曲は全15曲の4部構成だが、フルート曲は第3部「バラード」が省略された上で、旋律音形の反復や変奏の付加など若干、手が加えられている。結果として以下の通し番号を待つ3部構成（全14曲）の組曲に生まれ変わった。第1番～第4番は「悲しい民謡」と題された4つの短い歌。第5番は軽妙な「スケルツォ」。第6番～第14番は「村の踊り」で、互いに動機的に関連する9つの舞曲。終曲はバグパイプの伴奏のような効果を持つ。

L.ライタはハンガリーの作曲家、民族音楽学者、指揮者。生地ブダペストの王立音楽院でピアノと作曲を学び、バルトークやコダーイの民族音楽運動に加わり、彼らと共同研究を行なった。ハンガリー国立博物館で民俗音楽部門の研究員を経て国民音楽学校で作曲や室内楽の教授を務めた。1958年に作曲された《演奏会用ソナタ》は作曲家晩年の作品である。〈2つのカデンツァを伴った導入〉〈ノスタルジックな子守唄〉〈メランコリックなメヌエット〉〈陽気な楽章〉の4楽章からなり、第1楽章に民族的な語法が聴かれる。

6. LI HUAYU（フルート）

Pf. 渡部 有子

J.イベール ／ フルート協奏曲より
Jacques Ibert (1890-1962) // Concerto pour flûte et orchestra
第3楽章　Allegro scherzando

C.ドビュッシー ／パンの笛（シランクス）
Claude Debussy (1862-1918) // La Flute de pan (Syrinx)

P.タファネル ／ ミニヨンの主題によるファンタジー
Paul Taffanel (1844-1908) // Mignon's fantasy

Profile

中国山西省生まれ。8 歳からフルートの勉強を始める。2014 年に中国山西大学音楽学院のフルート専攻に合格、朱 魯亜氏に師事。その間に中国山西大学音楽学院「愛楽」オーケストラのフルート首席を務めた。2015 年から、中国音楽学院の倪 一珍氏に師事。2018 年 7 月に日本に留学。現在、渡部 亨氏に師事。

【解説】

1934年に作曲されたイベールの《フルート協奏曲》は、古今のフルート協奏曲の名作であると同時に技術的な難曲として知られる。第1楽章と第3楽章における複雑なリズムとフルートの華麗な技巧が聴き所だが、第2楽章もまたフランスの作曲家らしい典雅な響きと流麗な旋律が美しく、フルートの魅力が存分に楽しめる。本日は演奏する第3楽章はヘ長調、ロンド形式。4拍子と3拍子が一小節ごとに交互にくる管弦楽の序奏の後、独奏フルートに三連符を多用したロンド主題Aが現れる。続いてふわりと浮き上がるような主題Bが登場、再度Aに戻り、弦の伴奏でどこか東洋的な雰囲気のCとなり、ABA、カデンツァ、コーダで終わる。

《パンの笛（シランクス）》は、ドビュッシーにより1913年に作曲された無伴奏フルート作品。楽譜には変ロ短調の調性記号が付いているが、調性感は極めて曖昧であり、変ロ短調の主音であるBｂの音を中心に揺れ動く。

《ミニヨンの主題によるファンタジー》は、1796年に書かれたゲーテの小説『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』に基いてフランスの作曲家トマが1886年に書いたオペラ《ミニョン》をもとにしたファンタジーである。オペラの中の〈君を知るや南の国〉ほかのメロディが引用され、前半は美しい「歌」に満ち、後半は幅広い音域の中で縦横無尽に飛び回るようなパッセージが聴かれる。このようにフルートの機能と演奏者の技量が縦横に発揮できる作品である。

木管楽器
15:20

7. 三輪 桃子（オーボエ）

Pf. 星野 苗緒

F.プーランク ／ オーボエとピアノのためのソナタ FP.185
Francis Poulenc (1899-1963) // Sonate pour hautbois et piano FP.185
第1楽章　Elegie
第2楽章　Scherzo
第3楽章　Déploration（哀歌）

J.S.バッハ ／ ソナタ ト短調 BWV.1030b
Johann Sebastian Bach (1685-1750) // Sonate g-moll BWV.1030b
第1楽章
第2楽章　Siciliano
第3楽章　Presto

Profile

東京都出身。洗足学園音楽大学管楽器コース卒業。JBA 管打楽器ソロコンテスト第 3 位受賞。その後関東甲信越支部大会優秀賞受賞。洗足学園音楽大学在学中ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャパンに出演。フィリップ・トーンドゥル氏のマスタークラスを受講。これまでに、オーボエを辻 功、佐藤 亮一、倉田 悦子の各氏に師事。室内楽を辻 功、岩花 秀文、西脇 千花、星野 均の各氏に師事。

【解説】

フランスの作曲家フランシス・ジャン・マルセル・プーランクが1926年に作曲した《オーボエとピアノのためのソナタ》は、プーランク最晩年の作品であり、冒頭に「セルゲイ・プロコフィエフの思い出に」と書かれ、亡き畏友プロコフィエフに捧げられた。

第1楽章は、オーボエの短いソロから始まり穏やかな旋律が続く。中間部では一転して怒りをも感じさせるような激しさで演奏され、また穏やかな再現部に戻る。第2楽章はオーボエとピアノ両楽器の畳み掛けるような連打音が特徴的であり、快活に曲が展開していく。第3楽章は「哀歌」の表題に相応しいとても静かな楽章である。プーランク自身が「最後の楽章は典礼の歌に近いものである」と語っていることから宗教的色彩も感じられる。

ドイツの作曲家ヨハン・セバスティアン・バッハはバロック音楽の重要な作曲家である。この作品は元々バッハ自身がオーボエのために作曲されたことを明示する資料は存在しておらず、《フルートとチェンバロのためのソナタロ短調》BWV.1030として有名な作品である。現代ではフルートのパートをト短調に移調してしばしばオーボエとチェンバロ（ピアノ）のソナタとして演奏されている。

第1楽章はオーボエとピアノの右手が協奏的に絡み合う。半音階的楽句が多用されており音楽的な変化の幅を拡大している。第2楽章は第1楽章から一転して静かな楽章である。オーボエの美しい旋律にピアノの和声的な支えが加わり曲が展開していく。第3楽章は緊迫した3声のフーガに始まり、一度フェルマートとなって軽やかで印象的な最後を迎える。

8. 永田 博雅（フルート）

Pf. 井上 友美

J.S.バッハ ／ フルートとチェンバロのためのソナタ ロ短調 BWV.1030
Johann Sebastian Bach (1685-1750) // Sonate für Flöte und Cembalo h-moll BWV.1030
第1楽章　Andante
第2楽章　Largo e dolce
第3楽章　Presto

J.イベール ／ フルート協奏曲
Jacques Ibert (1890-1962) // Concerto pour flûte et orchestre
第1楽章　Allegro
第2楽章　Andante
第3楽章　Allegro scherzando

【解説】

J.S.バッハの《フルート・ソナタロ短調》BWV.1030はライプツィヒ時代後期の1736年頃の自筆譜が残っており、ビュッファルダンというフルート奏者のために書かれたとされている。第1楽章では、冒頭でフルートにより提示された主題は転調して、フルートとチェンバロによって何度も演奏される。主題の後半は多様に変形・展開され、フルートとチェンバロないし、チェンバロの右手と左手の間にカノン風な模倣が行われる。第2楽章は各部分の反復を伴う二部形式。チェンバロの和声的な伴奏の上に、フルートが主題を演奏する。シチリアーノのリズムが取り入れられている。第3楽章はプレストとアレグロの2部分からなる。プレスト部分は3声のフーガで、主題は最初フルートに現れ、チェンバロ上声部一下声部の順で演奏される。アレグロでは拍子が12/16に変わってジーグに入り、フルートの旋律と美しく絡み合って進む。

イベールの《フルート協奏曲》は、1934年2月にマルセル・モイーズのフルート、フィリップ・ゴーベールの指揮、パリ音楽院管弦楽団によって初演された。第1楽章はソナタ形式によって対照的な第1主題、第2主題が演奏され、構造上ゆるぎなく活気に満ち溢れた楽章になっている。第2楽章はフルートの魅力を最大限に活かした抒情的な楽章。長いフレーズの旋律が特徴的であるが、曲の最後はハーモニクスで終えるなどフランス近現代らしい手法も見られる。第3楽章はサルタレロやジャズのテイストを取り入れた非常に活気に満ち溢れた楽章。中間部では民族的な旋律が見られる。再現部に入ると途中にカデンツを挟むものの、激しく軽快なフィナーレを迎える。

Profile

千葉県出身。洗足学園音楽大学管楽器コース卒業。第 21 回浜松管楽器アカデミー＆フェスティバルにおいてジェフリー・ケナー氏のマスタークラスを修了。マーク・グローウェルズ、フィリップ・ベルノルド各氏のマスタークラスを受講。パオロ・タバリオーネ氏のプライベートレッスンを受講。フルートを酒井 秀明、吉岡 次郎の各氏に師事。

打楽器
10:00

1. 角田 和渉（マルチパーカッション）

Pl. 小松 幹　Pl. 川村 真隆
Pl. 伊藤 陽介　Pl. 細野 幸一
EO. 大熊 美子　EO. 内海 菜々美

石井 眞木 ／ サーティーン・ドラムス 作品66
Maki Ishii (1936-2003) // Thirteen Drums op.66

石井 眞木 ／ アフロ・コンチェルト ーヴァージョンB 作品50B
Maki Ishii // Afro Concerto – Version B op.50B

【解説】

本日は石井眞木の作品を2曲演奏するが、石井自身がそれぞれの曲について述べた文章をここに引用し、曲目解説とする。

《サーティーン・ドラムス》は、あえてこの現代の常識に反抗した作品である。13個の膜質打楽器のみを用い、長い余韻を有する打楽器、あるいは音色的な打楽器は一切使用していない。膜質の太鼓の律動的魅力を再認識するためでもあったが、12個からなる拍節ー16分音符の単純なリズムセリーによる数理的秩序と、第13拍節に侵入する非定量的リズムとの相互作用とその展開が、この作品の核を形成している。このことを明瞭に知覚できるよう、との意図で選択された楽器編成でもある。《サーティーン・ドラムス》は、太鼓を叩くという原点への回帰と、定量的なリズムと非定量的リズムの交錯に新しい地平を求めた。

《アフロ・コンチェルト》は、アフリカの土俗音楽の魅力ー執拗な反復がまきおこす呪術的な音楽の世界に魅せられ、そこから大きな触発をうけて作曲された。具体的には打楽器独奏者は、数種の皮質の「アフリカン・ドラム」や、マリンバのルーツともいわれる単純な音階をもつ当地の鍵盤打楽器「バラフォン」なども駆使して、独特な音響時空間を現出させる。そして、この作品の核になる音響構造にも、アフリカのセヌフォやピグミーの音楽のいくつかの断片が用いられており、独奏者とオーケストラが、音色、音形をさまざまに変えながら「執拗に反復」されて曲は進行していく。この協奏曲では「アフリカ」が曲の内容と緊密なかかわりをもっているのである。

石井の特色が特にわかる2作品、色彩豊かなプログラムをお楽しみいただきたい。

Profile

群馬県出身。12 歳から打楽器を始める。洗足学園音楽大学打楽器コース卒業。今までに打楽器を高田 亮、森 茂、山澤 洋之の各氏に師事。和太鼓を林 英哲氏に師事。音楽の和洋を問わず日々研鑽している。宮崎県宮崎新聞社主催宮日コンクールにて優秀賞を受賞。

2. LIU JIN（マリンバ）

I. クセナキス ／ ルボン
Iannis Xenakis (1922-2001) // Rebonds
ルボンB　Rebonds B
ルボンA　Rebonds A

J.S バッハ ／ 無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ第2番 イ短調 BWV.1003より
Johann Sebastian Bach (1685-1750) // Violin Sonata No.2 in A minor BWV.1003
第2楽章　Fuga（フーガ）

安倍 圭子 ／ 道・パラフレーズ ～ソロマリンバ のための～
Keiko Abe (b.1937) // MICHI Paraphrase for Solo Marimba

【解説】

《ルボン》は、ギリシャの作曲家ヤニス・クセナキスによるソロパーカッションのための作品である。クセナキスはアテネ工科大学で建築と数学を学び、建築家であるル・コルビュジェの弟子として働く傍ら、パリ音楽院にて作曲方法を学び、作曲に数学の理論を応用した方法を発案した。作品はAパートとBパートに分かれている。曲名である《ルボン》は英語でリバウンドを意味する。打楽器の奏法として特徴的な「スティック/マレットの打面からの跳ね返り」を活用した楽曲である。

《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ 第2番》は、18世紀のドイツで活躍したJ.Sバッハによるソロヴァイオリンのための作品である。第2楽章の〈フーガ〉は三重音や四重音が用いられる、起伏に富んだスケールの大きいフーガで、至る所にあらわれるオクターブの跳躍は音楽に躍動感と起伏感を与えている。

《道・パラフレーズ～ソロマリンバ のための～》は日本の作曲家・安倍圭子によるソロマリンバ のための作品である。タイトルの「道」は、人それぞれに歩む道を意味している。シンプルな右手のメロディーと同じモードを繰り返す左手の演奏が特色の一つである。トレモロなしでレガートなフレーズを感じさせるように書かれているが、それは他の楽器にはない、マリンバ 独自の世界である。私は洗足に入学するときの試験曲が同じく安倍圭子の《道》であった。本曲の《道・パラフレーズ》は《道》から発展し、より華やかな雰囲気を持たせた曲である。大学院2年間の道を歩んで、本曲を演奏することを通して、これから先の道へと繋いでいく。

Profile

中国湖南省生まれ。小学校からピアノ、高校から打楽器を学ぶ。中国国防科学技術大学附属高校を卒業後、華中師範大学音楽学院打楽器コースに進学。大学在学中に陽光交響楽団、Tian Kong 合唱団の主席打楽器奏者等を務め、数々の演奏会に出演。2018 年に同大学打楽器コースを首席で卒業。これまでに打楽器を佟 文迪、孫 中煒、神谷 百子、山田 徹の各氏に師事。

3. HSIEH SHENGHUNG（マルチパーカッション）

石井 眞木 ／ 飛天生動Ⅲ 作品75
Maki Ishii (1936-2003) // Hiten-Seidō III op.75

石井 眞木 ／ サーティーン・ドラムス 作品66
Maki Ishii // Thirteen Drums op.66

【解説】

《飛天生動》の《Ⅲ番》作品75は1987年に作曲され、ベルリンで藤井むつ子氏が初演した。中国の敦煌石窟の壁画に飛翔する「飛天」。「飛天」とは仏教で諸仏の周囲を飛行遊泳し、礼賛する天人を意味する。その壁画は366年から1368年までの各時代の沢山の敦煌石窟で修業した僧侶と画家たちによって描かれた。中国南北朝時代（420-589）の南朝に活躍した画家と評論家の謝赫による画論である『古画品録』に始まる6種の法則。その第1条には気韻生動がある。意味は作品に気高い風格や気品が生き生きと表現されていること。タイトルは「飛天」とこの気韻生動の合成語になっている。《飛天生動》はシリーズであり、《Ⅰ番》作品48bは雅楽合奏のため、そして《Ⅱ番》作品55はマリンバデュオのための曲である。今日演奏の《Ⅲ番》作品75は、マリンバソロ曲である。

《サーティーン・ドラムス》作品66は1985年に作曲された。菅原淳氏が委嘱、初演した作品である。この曲は和太鼓の演奏にインスピレーションを得て書かれている。マルチパーカッションのために書かれた作品の中でも代表的なものである。19世紀後半から様々な新しい打楽器が生まれ、これによって世界の作曲家たちが打楽器のための複雑な曲をどんどん書くようになったが、この曲では仔牛の皮で作られた太鼓だけが使用され、リズムにも複雑な音型が使用されず、特殊な13線の譜面もわかりやすく、使われる音符は16分音符と装飾音符、長いロールと休符だけである。楽譜の見た目は簡単な曲であるが、レベルとスピード、体力と音量の変化がとても大切になってくる。

Profile

台湾出身、台湾国立嘉義大学音楽学部卒業。これまでに打楽器及びマリンバを、CHANG YU-YING、HO HUNG-CHI、神谷 百子、塚越 慎子、古川 玄一郎の各氏に師事。

打楽器
12:05

4. 島津 翠（マルチパーカッション）　Pf. 石田 多紀乃

J.S.バッハ ／ 無伴奏チェロ組曲 第3番 ハ長調 BWV.1009より
Johann Sebastian Bach (1685-1750) // Suite für Violoncello solo No.3 C-dur BWV.1009
- 第5曲　Bourree I/II（ブーレ Ⅰ/Ⅱ）
- 第6曲　Gigue（ジーグ）

E.セジョルネ ／ マゼラン協奏曲
Emmanuel Séjourné (b.1961) // Magellan Concerto
- 第1楽章　並外れた提案　An Extraordinary Proposition
- 第2楽章　準備と出発　Preparations and Departure
- 第3楽章　南アメリカとの反乱　South America and Rebellion
- 第4楽章　太平洋　Pacific Ocean
- 第5楽章　待ち伏せ、死、そして帰還　Ambush, Death and Return

【解説】

ヨハン・セバスティアン・バッハが1720年頃に作曲した《無伴奏チェロ組曲 第3番 ハ長調》BWV.1009は、組曲の前半3曲の中で最も端麗で雄大な作品といえる。今回は第5曲〈ブーレI/II〉と第6曲〈ジーグ〉を演奏するが、1音ずつが点で線にはならないマリンバでも、先へ先へと繋がるフレーズ感や深い響きをどこまで表現できるかの挑戦である。

《マゼラン協奏曲》は、エマニュエル・セジョルネが2010年に書いた作品であり、タイトルは航海者・探検家のフェルディナンド・マゼラン Ferdinand Magellan (1480-1521) から来ている。マゼランの航海している様が各楽章の副題に名付けられ、各楽章に定められた演奏する位置がおおよそマゼランの航海した経路を表しており、音楽もそれに沿って書かれている。第1楽章の「並外れた提案」とはマゼランが新しい経路を見つけた事を表す。マリンバのみで演奏されるこの楽章には、難しいテクニックが盛り込まれている。第2楽章「準備と出発」は多彩な楽器を用いて遅いテンポから始まり、第3楽章に向けて高揚するような情景。第3楽章「南アメリカとの反乱」では「反乱」と題している通りスネアドラムでの過激な音楽が流れ、第4楽章の「太平洋」では太平洋の大海原がヴィブラフォンで壮大に描かれている。第5楽章「待ち伏せ、死、そして帰還」では、帰還する前に返り討ちに遭い死んでしまう情景や、反乱が終わり静けさへと導かれる様が太鼓で描かれ、仲間と帰還するシーンでは第1楽章で用いたマリンバが使われ静かに曲が終わる。打楽器によって描かれたマゼランの航海をどう表現するか聴いていただきたい。

Profile

東京都出身。11歳より打楽器、13歳よりピアノを始める。東京都立杉並高等学校を経て、洗足学園音楽大学打楽器コースを卒業。これまでに小川 佳津子、幸西 秀彦、荷田 真樹、清水 太、野本 洋介、古川 玄一郎の各氏に師事。

5. 石川 まみ（マリンバ）

M.フォード ／ モーション・ビヨンド
Mark Ford (b.1958) // Motion Beyond

M.フォード ／ ランサム
Mark Ford // Ransom

J.アンダーソン ／ カロン
Jonathan Anderson (b.1985) // Charon

【解説】

《モーション・ビヨンド》はM.フォードによって1998年に作曲された。曲全体として1つのモチーフとなるリズムがある中、フレーズの切り替わりで常に少しずつ変化していく様子が描かれている。低音域から高音域まで幅広く使われていることで音色が変化する箇所や、中間部分のシンコペイトするビート、そして雰囲気が変わり細かい動きの中から上行する繊細さのある音楽と、場面ごとに多彩な音楽を作っている。

《ランサム》もM.フォードによって2010年に作曲された曲である。前記の《モーション・ビヨンド》と同じ作曲家でも曲想ががらりと変わり、非常に巧妙であり、多くの高度なマリンバ技術が使用されている。曲はゆっくりと動く神秘的な和音から始まり、その後反復するリズムパターンと分離したメロディーのパッセージを使用して曲が続いていき、その中での和声やリズムがグラデーション的に交差・ブレンドしながら曲が進んで行く。

《カロン》はマリンビストである塚越慎子のために書かれた。とても面白い先進的なソロ曲で、特に右手での単一の独立したロールでのメロディーとその裏で左手で奏でる伴奏が印象的である。この作品ではラーガが繰り返し使用されており、インドの古典音楽の影響を受けている。作曲家は「タイトルはギリシャ神話に由来しています。カロンは亡くなった人をステュクス川とアケロン川を渡ってフェリーで運ぶ船頭です。これは作品の暗くて攻撃的な態度に完全にあっていると感じました」と述べている。

Profile

神奈川県出身。13歳より打楽器を始める。三浦学苑高等学校音楽選択コース卒業。洗足学園音楽大学打楽器コース卒業。アニメーション映画『リズと青い鳥』のレコーディングに参加。幼稚園や保育園での演奏活動も幅広く行っている。令和2年度、大学院コンチェルトのタペソリストに選出され、現田 茂夫氏指揮、洗足学園音楽大学大学院室内楽管弦楽団とエックハルト・コペツキ作曲《マリンバ協奏曲》を共演。これまでにマリンバ・打楽器を髙田 苑、小川 佳津子、塚越 慎子の各氏に師事。室内楽を石井 喜久子氏に師事。

電子オルガン 14:45

1. CHEN YUJIN（電子オルガン）

B.ティモンズ ／ モーニン
Bobby Timmons (1935-74) // Moanin'

J.ブラームス ／ 交響曲 第1番 ハ短調 作品68より
Johannes Brahms (1833-97) // Symphony No.1 in C minor op.68
第1楽　Un poco sostenuto-Allegro

H.シルバー ／ ナットビル
Horace Silver (1928-2014) // Nutville

Profile

中国出身。西安音楽学院卒業。2016年7月に来日後、2018年エレクトーン フェスティバル アンサンブルコンテスト銀賞を受賞。電子オルガンを譚 艺民、大木 裕一郎、高田 和泉、加曽利 康之の各氏に師事。

【解説】

《モーニン》は、ジャズドラマーのアート・ブレイキーが1958年に発表したアルバム『Moanin'』のタイトルチューンであり、ピアニストのボビー・ティモンズが作曲した楽曲である。教会音楽を源流とするコール・アンド・レスポンスに影響を受けたイントロを持ち、ファンキー・ジャズというジャンルを代表する曲とされる。実際の演奏ではピアノの呼びかけの微妙な揺れや強弱にブラスセクションも反応しており、演奏全体に緊張感と独特のグルーヴを与えている。

《交響曲 第1番 ハ短調》はブラームスが20代の時に書き始めた作品だが、完成したのは彼が43歳となる1876年であった。第1楽章は堂々とした序奏で始まる。ティンパニの上に弦楽器が半音ずつ上昇していく悲壮感漂うメロディーを演奏し、管楽器は反対に下降形のメロディーを演奏する。この部分が終わると穏やかになり、その後はソナタ形式で書かれたアレグロの部分に入っていく。展開部冒頭では第1主題が巧みに活用され、一旦静かになった後に序奏部のように盛り上がり、ティンパニが激しく連打するクライマックスを築いた後に再現部に入る。最後は第1主題のメロディーがハ長調で演奏される。

《ナットビル》は、テナーサックスとトロンボーンのリードが印象的なホレス・シルバー作曲のビッグバンドのラテン・ナンバー。名ジャズドラマー、バディ・リッチの代表曲としても知られている。スピード感に満ちたラテン的なビートと4ビートを交互に繰り返しながら、時折バディ・リッチのドラムに絡むタイトなホーンセクションの不協和音的なハーモニーが曲全体を非常にスリリングな印象に仕立て上げている。

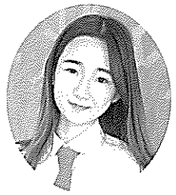
2. XU JINGWEN（電子オルガン）

A.メンケン [星出 尚志編曲] ／ リトル・マーメイド・メドレー
Alan Menken (b.1949) [arr.Takashi Hoshide (b.1962)] // Little Mermaid Medley

XU JINGWEN (b.1995) ／ おひとりさま

S.プロコフィエフ ／《ロミオとジュリエット》組曲第2番 作品64ter (1938年版) より
Sergei Prokofiev (1891-1953) // Romeo and Juliet Suite No.2 op.64ter (1938 edition)
騎士たちの踊り　Danse of the Knights

兼田 敏 ／ 日本民謡組曲《わらべ唄》
Bin Kaneda (1935-2002) // Japanese Folk Song "Warabe uta"
第1楽章　あんたがたどこさ　Where Are You From
第2楽章　子守歌　Lullaby
第3楽章　山寺のお尚さん　An Ancient Priest in a Mountain Temple



Profile

中国広東省出身。2017年、星海音楽学院を卒業、謝 及氏に師事。現在、高田 和泉、渡辺 睦樹の各氏に師事。

【解説】

『リトル・マーメイド』は、1989年に全米で公開されたディズニー映画で、日本では1991年に公開された。アラン・メンケンは、アメリカ合衆国のミュージカル音楽および映画音楽の作曲家・ピアニストであり、特に舞台とディズニー映画の音楽で知られる。本日演奏するメドレーは、〈アンダー・ザ・シー〉、〈キス・ザ・ガール〉、〈パート・オブ・ユア・ワールド〉の3曲から構成される。

《おひとりさま》は、演奏者のオリジナル作品。一人の生活の気軽さやリラックスした雰囲気をジャズ風にアレンジして表現している。ピアノ、ジャズギター、トロンボーン、フルートなどの比較的小編成な編成のアレンジにとどめ、軽快な旋律を際立てている。

《ロミオとジュリエット》は、ロシア（旧ソ連）の作曲家プロコフィエフによるバレエ音楽。イギリスの劇作家シェイクスピア（1564-1616）による、モンタギュー家のロミオとキャピュレット家のジュリエットの悲恋の物語が原作である。〈騎士たちの踊り〉は、バレエ音楽から抜粋して作られた組曲第2番では、第1曲〈モンタギュー家とキャピュレット家〉に組み込まれている。尊大でもったいぶった雰囲気が、若い恋人達と相容れない価値観を表現する。途中でジュリエットが親の決めたいいなずけの伯爵と踊る、おどおどとした音楽が挿入される。

《日本民謡組曲「わらべ唄」》は、1962年にヤマハ吹奏楽団の演奏会のために、当時の指揮者である原田元吉から委嘱を受けて作曲された。3つの日本のわらべうたをテーマとして、第1楽章〈あんたがたどこさ〉、第2楽章〈子守歌〉、第3楽章〈山寺の和尚さん〉の3楽章構成になっている。

電子オルガン 15:50

3. ZHANG LEIQIAN（電子オルガン）

J.ゴールドスミス ／『ムーラン』より 組曲
Jerry Goldsmith (1929-2004) // Suite from Mulan

ZHANG LEIQIAN (b.1991) ／ 森の空から

E.グリーグ ／《ペール・ギュント》組曲第1番 作品46
Edvard Grieg (1843-1907) // Peer Gynt Suite No.1 op.46
第1曲　朝　Morning Mood
第2曲　オーセの死　The Death of Ase
第3曲　アニトラの踊り　Anitra's Dance
第4曲　山の魔王の宮殿にて　In the Hall of the Mountain King

Profile

中国広東省出身。2015年に星海音楽学院を卒業、劉 麗娜氏に師事。現在、高田 和泉、加曽利 康之の各氏に師事。

【解説】

《『ムーラン』より組曲》は、1998年に全米で公開されたディズニーの長編アニメーション映画『ムーラン』の挿入曲であり、ジェリー・ゴールドスミスにより作曲された。中国を舞台に繰り広げられる話であるため、その音楽にも中国の民族楽器が使われており、中国風の色彩が与えられている。

《森の空から》は演奏者のオリジナル作品である。大自然からインスピレーションを得て、森のスピリチュアルな情景を物語っている。

ヘンリック・イプセンが1867年に書いた『ペール・ギュント』は、自由奔放なペール・ギュントが旅に出て年老いて帰ってくるまでを描いた戯曲で、全5幕から成る。当初の意図とは違って舞台で実際に上演されることとなり、イプセンはグリーグに劇音楽の作曲を依頼した。イプセンからの依頼を若きグリーグは光栄に思いながらも、一旦は断ろうと考えた。それは、自身の音楽が抒情的であるため、破天荒な男の人生遍歴と魂の救済をテーマとするスケールの大きい物語を描く劇音楽に適しているかどうか疑問に思ったからである。しかし、この作品の意義を認めて作曲に着手し、苦心して曲を書き上げた。そして、1876年2月24日、イプセンとグリーグという傑出した芸術家の合作によるこの不朽の名作は、クリスチャニア（現オスロ）の国民劇場で初演された。後にグリーグはこの音楽の中から4曲ずつを選び、2つの組曲に改作した。本日は、1888年に完成した第1組曲を演奏する。

4. WEN JINGXI（電子オルガン）

P.I.チャイコフスキー ／ バレエ音楽《くるみ割り人形》作品71より
Pyotr Il'ych Tchaikovsky (1840-93) // The Nutcracker Suite op.71
花のワルツ　Waltz of the Flower

G.フォーレ ／ パヴァーヌ 作品50
Gabriel Fauré (1845-1924) // Pavane op.50

J.ウィリアムズ & P.ドイル [M.ストーリー編曲] ／
映画《ハリー・ポッターと炎のゴブレット》より
John Williams (b.1932) & Patrick Doyle (b.1953) [arr.Michael Story (b.1956)] //
Harry Potter and the Goblet of Fire
ヘドヴィグのテーマ　Hedwig's Theme
ポッター・ワルツ　Potter Waltz

A.メンケン [文 婧曦編曲] ／ ディズニーランド・セレブレーション
Alan Menken (b.1949) [arr.WEN JINGXI (b.1995)] // A Disneyland Celebration

Profile

中国出身。2017年に四川音楽学院を卒業。2013年に中国第五回春城杯銅賞、2016年に第10回中新国際音楽コンクール電子オルガン第7組最佳演奏賞を受賞。赤塚 博美、加曽利 康之の各氏に師事。

【解説】

〈花のワルツ〉は、チャイコフスキーの3番目のバレエ音楽《くるみ割り人形》の中の有名なワルツで、善良で勇敢な少女クララを歓迎し賛美する盛り上がった雰囲気の中で演奏される。ハープの華麗で滑らかな序奏の後、ホルンの重奏とクラリネットの呼応によってワルツの叙情的で優美な主題を演奏する。メロディは歌のようで、金平糖の精と、砂糖でできたばらの花束を持つ侍女たちの軽やかでしなやかな踊りを表現する。

《パヴァーヌ》は、フォーレの曲の中でも有名であり、人気が高い。パヴァーヌとは、16-17世紀初期の2拍子のゆっくりとした宮廷舞踏で、北イタリア起源と考えられる。また名称は、美しい羽根をゆったりと広げる孔雀（スペイン語でpavon）に由来するという説がある。

『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』は、イギリスの児童文学作家、J.K.ローリングが2000年に発表した「ハリー・ポッター」シリーズの第4巻で、2005年に映画化された。本日は、J.ウィリアムズ作曲の〈ヘドヴィグのテーマ〉と、P.ドイルがこの第4作のために作曲した〈ポッター・ワルツ〉を組み合わせた音楽を演奏する。緊張感ある神秘的な基調から、明るく楽しい雰囲気へと変わるのを味わっていただきたい。

《ディズニーランド・セレブレーション》は、〈Fantasmic〉、〈Mickey Mouse March〉、〈Zip-A-Dee-Doo-Dah〉、〈It's A Small World〉、〈Part of your World〉、〈Be Our Guest〉という6曲をメドレーにした作品。ディズニーらしく、楽しい音楽になるように編曲した。

5. WANG XICHEN（電子オルガン）★

J.シュトラウスⅡ世 ／ 円舞曲《春の声》作品410
Johann Strauss II (1825-99) // Frühlingsstimmen op.410

李 志輝 ／ 千江有水千江月
Li Zhi-hui (b.1972) // Moonlight Over Qian River

A.メンケン [真島 俊夫 編曲] ／《美女と野獣》メドレー
Alan Menken (b.1949) [arr. Toshio Mashima (1949-2016)] // Beauty and the Beast Medley

【解説】

《春の声》は、ヨハン・シュトラウスⅡ世の1882年の作品。ある晩餐会の余興で、当時71歳のフランツ・リストがピアノ、シュトラウスⅡ世がヴァイオリンを弾いて即興的に演奏するうちにできあがったと言われている。その後、プラハ出身のピアニストで、シュトラウスのワルツの演奏会用パラフレーズの演奏でも有名なアルフレート・グリュンフェルトに献呈された。短い序奏のあと、3つのワルツと第1ワルツを再現するコーダが続く構成をとっている。当時ヨハン・シュトラウスⅡ世が3度目の結婚で得た幸福感を味わっていたことが、曲名や曲想に反映されたという説もある。

《千江有水千江月》は、李志輝の2011年の作品。タイトルは、月は一つしかないものの、水面にはたくさんの月影を写し出すことが出来る、人の心が水のように清らかであれば、悟りや知恵を必ず映し出せるはずだ～という意味の禅語で、遠く離れて暮らす中国南方人の家族や恋人に対し、私たちの心は離れられないというメッセージを表現している。中国古来の民族楽器と西洋の電子楽器の融合による音楽の新境地を味わえる作風である。

1991年に制作されたディズニーの長編アニメーション映画『美女と野獣』は、フランスに古くから存在する説話をモチーフとして、J・L・ド・ボーモン夫人がまとめた物語を原作としている。映画の音楽を担当したアラン・メンケンは、アメリカ合衆国のミュージカル音楽および映画音楽の作曲家・ピアニスト。彼の音楽は、100年以上も語り継がれてきた物語に込められたメッセージが、いつまでも色褪せないと歌っているかのようである。本日は映画の印象的な音楽をメドレーで演奏する。

Profile

中国出身。2017年に四川音楽大学を卒業。2018年には昭和音楽大学の研究生として学ぶ。2015年、第1回四川省電子オルガン優秀賞。2017年、第11回中新国際電子オルガン銀賞。現在は、髙田 和泉、加留利 厚之の各氏に師事。

作曲・二胡
14:15

1. ZHU BAIQING（二胡）

劉 天華 ／ 閑居吟
Liu Tianhua (1895-1932) // Meditation in Retirement

劉 天華 ／ 月夜
Liu Tianhua // Moonlight Night

劉 天華 ／ 病中吟
Liu Tianhua // The Sound of Agony

劉 天華 ／ 独弦操
Liu Tianhua // Melody on a Single String

【解説】

《閑居吟》(1928)は静かで心地よく、かつ伸び伸びとして快適な情調に満ち溢れた楽曲である。おそらく劉天華が当時、勉強する機会を失い、自宅で過ごしていたころの閑居の生活を曲にしたものであろう。ハーモニクスを大胆に採用して透明感を増加し、一種の深遠でよく通った音の境地を醸し出している。楽曲のコーダの部分に用いたハーモニクスは、深遠で静かで厳かなイメージを一層はっきりと表現している。

《月夜》(1924)は劉天華が夏の夜に涼を取った際、詩情が生まれ、月を臨んで心の中の感慨を吐露して作曲したものである。楽曲は3つの部分に分けられ、各部分の終わりがいずれも同じフレーズから成り、まるで一唱一嘆、月夜に対して心からの賛嘆の声を表したものである。

《病中吟》(1918年)は劉天華の処女作で、最初の曲名は《安適》で、または《胡適》という。これはまた「人生とは何につき従うのかわからないという意味である」と作者自ら述べており、さらに「《病中吟》は病気にかかるという意味ではなくて、心中の苦悶が病のようなものであることを示しており、闇の中で生まれた歌である」と述べているとおり、作者の内心の苦悶、迷いと行きどころのない憤慨を表現している。

《独弦操》(1932)はもとの曲名は「憂心曲」といい、世を憂い、時に心を痛める強い気持ちが伝わってくるが、感傷のなかにもまた希望と生命の新たな1ページを追求する期待をも含んでいる。全曲は内弦だけで演奏し、ポジションの移動はかなり大きく、演奏することが極めて困難であり、ピッチの正確さと音色のコントロールにおいては演奏者の修練と腕前に極めて大きく依存している。

Profile

中国青島出身。天津音楽学院民族楽器学部中国楽器演奏専攻二胡表演コースを卒業。2007年青少年楽器コンクール金賞を受賞。天津音楽学院2010年度音楽表演エリートを授与される。2011年国際第二回中国楽器コンクール銅賞を受賞。二胡を許 可氏に師事。

作曲・二胡
15:15

2. 吉田 健人（作曲）

Fl. 佐々木 美緒　Ob. 河村 真歩
Cl. 原田 優　Fg. 髙橋 遥　Hr. 影山 舞

吉田 健人 (b.1991) ／ Bläserquintett (木管五重奏曲)
第1曲　Bucimis（ブチミシュ）
第2曲　Intermezzo（間奏曲）
第3曲　Werk ohne 'Treffen'（対面なし）

【解説】

この作品は3曲で構成されている。第1曲〈Bucimis〉は2+2+2+2+3+2+2のように分割される、ブルガリア舞踊のリズム・システムを取り入れている。これに西洋クラシック音楽の拍節感を当てはめると4/4+7/8となる。基本単位となる15拍は5+5+5と分割することも可能なので、この曲では本来のリズムとのポリリズムを経て5/8に到達する。その後4/4+7/8に戻るが、コーダではテーマを5/8と6/8で交互に繰り返すなど、不均等な分割なリズムが続く。

第2曲〈Intermezzo〉では第1曲と第3曲のモチーフを使い、前後2曲をまとめる役割を担っている。ゆったりした曲調の中、あまり変化しない一定した伴奏音型に対して、メロディーは様々な調を行き交う。

今年のコロナ・ウイルスによる自粛期間中のバンドメンバーとのLINE通話からは様々な着想を得た。電話やインターネットを使った通話では、一緒に演奏しようとしてもズレが生じる。また、一人が楽器を演奏し、私がそれに合わせて歌う際、演奏が揃わないため、途中で聞こえてくるリズムよりも前にずらして歌うこともあった。これらの経験から第3曲〈Werk ohne "Treffen"〉はメロディーと伴奏のリズムが合わないというコンセプトを元に作曲している。第1主題の確保では、旋律のみが最初のテーマより2/3拍遅れている。第2主題ではオーボエよりファゴットが遅れて入るがスピードをあげ、最終的に追いつくのである。その後クラリネットのピッチベンドが入るが、これは笑い声を表している。再現部ではずれないリズムを用いて、対面で演奏できる喜びを表している。

Profile

愛知県出身。尚美学園大学芸術情報学部音楽表現学科作曲コース卒業。作曲を坂田 晃一、外山 和彦、市川 景之の各氏に師事、作曲理論を愛澤 伯友、大江 千佳子の各氏に師事、ピアノを細田 秀一、守屋 純子の各氏に師事、クラシックギターを髙須 勉民氏に師事。尚美学園大学芸術情報学部音楽表現学科第13回定期演奏会にて今村 能氏指揮により管弦楽曲《Perhaps》を初演。2016年4月より2018年2月まで株式会社サウンドハウスでの営業・海外営業を担当すると共に、YouTubeコンテンツ用の楽曲制作にも携わる。

3. 原 雅史（作曲）

原 雅史 (b.1996) ／ 交響曲第1番

第1楽章　Adagio risoluto - Allegro
第2楽章　Scherzo Allegro
第3楽章　Rondo Allegro

【解説】

本作品は、昨年発表した《シンフォニエッタ～弦楽オーケストラのために～》を2管編成へとさらに規模を拡大させた、自身初の《交響曲第1番》である。

新型コロナウイルスの感染拡大で、生演奏での実現は叶わないが、実技指導教員の松尾 祐孝先生の許可をいただき、自身が尊敬して止まない作曲家・ベートーヴェン生誕250年記念への、等身大の気持ちを譜面に込めた。

調性は無調を採用し、また動機労作で全曲を統一した3楽章構成の交響曲を目指した。第1楽章はソナタ形式。第1主題はベートーヴェン《交響曲第5番》の動機を、第2主題はショスタコーヴィチ《交響曲第5番》の動機を参考にした。さらに「ショスタコーヴィチ(DSCH)音型」を参考に、自身のイニシャル「H・A・F・M」音型を一部に使用する試みに挑戦した。第2楽章はスケルツォの3部形式。主題はショスタコーヴィチ《弦楽四重奏曲第8番》の第3楽章の動機を参考にして、ベートーヴェンのイニシャル「L・B・E・H」音型を一部に使用した。第3楽章はロンド・ソナタ形式。ベートーヴェン《交響曲第6番「田園」》の第5楽章を意識した。主要主題はストラヴィンスキー《春の祭典》、副主題はショスタコーヴィチ《弦楽四重奏曲第8番》第2楽章、コーダはバルトーク《弦楽四重奏曲第4番》第5楽章を参考にした。この楽章にもベートーヴェン音型を一部使用した。

音源の再生に関しては、客員教授の小松 久明先生、音楽・音響デザインコース、音楽環境創造コースの方々の御協力を得て実現させることができました。心より感謝申し上げます。

Profile

東京都出身。洗足学園音楽大学作曲コース卒業。6歳でピアノを始める。ローランド RMS 音楽教室（現：トート音楽院）に入り、ピアノを篠原 恵子氏、作曲を桃井 聖司氏に師事。第10回ローランドファンタスティックピアノコンクール東京地区大会中高生の部敢闘賞。大学在学中に第1回、第2回K作曲コンクール作曲賞、第3回K作曲コンクール奨励賞を受賞。現在、大学入学時より作曲を松尾 祐孝氏に師事。大学院入学時より DAW を小谷野 謙一氏に師事。

ピアノ
10:00

1. 隈元 沙綾（ピアノ）

F.プーランク ／ バディナージュ FP.73

Francis Poulenc (1899-1963) // Badinage FP.73

F.プーランク ／ 3つの小品 FP.48

Francis Poulenc // Trois pièces FP.48

第1曲　パストラール　Pastorale
第2曲　讃歌　Hymne
第3曲　トッカータ　Toccata

F.プーランク ／ 組曲《ナゼルの夜会》FP.84

Francis Poulenc // Les soirées de Nazelles FP.84

第1曲　序奏　Préambule
第2曲　分別の極み　Le comble de la distinction
第3曲　手の上の心臓　Le cœur sur la main
第4曲　磊落と慎重と　La désinvolture et la discrétion
第5曲　思索の続き　La suite dans les idées
第6曲　口車の魅力　Le charme enjôleur
第7曲　自己満足　Les contentement soi
第8曲　不幸の味　Le goût du malheur
第9曲　老いの警報　L'alerte vieillesse
第10曲　カデンツァ　Cadence
第11曲　フィナーレ　Finale

F.プーランク ／ メランコリー FP.105

Francis Poulenc // Mélancolie FP.105

【解説】

《バディナージュ》は、単純明快なメロディーでありながらも、色彩豊な響きを味わえる作品である。尚、バディナージュとは「冗談」という意味である。

《3つの小品》は、恩師リカルド・ヴィニェス（1875-1943）に捧げられた作品である。第2曲の〈讃歌〉は、ストラヴィンスキーとショパンからの影響が見られる。第3曲の〈トッカータ〉はピアニストのウラディミール・ホロヴィッツ（1903-89）が初録音し、彼が好んでコンサートで弾いていたことで有名になった。目まぐるしく変化するパッセージは生き生きとし、機知に富んだ作品である。

《ナゼルの夜会》は、プーランクのピアノ作品のサロン的要素が色濃く出ている作品である。この曲集は「リエナール叔母」に捧げられた作品で、彼女はプーランクと血縁関係はなかったものの、厚い信頼を寄せていた人物である。彼女の家は一種のサロンであり、そこでプーランクはピアノを即興することもあった。楽譜の冒頭には「この作品の中心を形作る変奏曲は、作者がピアノの周りに集まった友人たちの肖像を、ナゼルの夕べで即興演奏されたものである。我々は今日、序奏とフィナーレの間に置いたそれら〈肖像〉が、夜、窓の開かれたトゥレーヌの客間での遊びを思い出させるかもしれない、と望んでいる」と書いてある。〈肖像〉と呼ばれる〈変奏〉にはそれぞれ副題があり、サロンに集まった人々の性格を描写したものである。

《メランコリー》は、プーランクのピアノ作品にしては珍しく長い曲である。第二次世界大戦中に疎開した先から作られた作品である。静かな美しさは、外界を遮断し、内的な美に没入するかのような姿勢が見られる。

Profile

東京出身。洗足学園音楽大学ピアノコース卒業。ピアノを飯野 明日香氏に師事。

2. 加藤 瑞穂（ピアノ）

Profile

愛知県豊橋市出身。洗足学園音楽大学ピアノコース卒業。3歳からピアノを始め、加藤 美菜子、隈本 浩明の各氏に師事。第30回ピティナ・ピアノコンペティションB級銅賞。現在は江崎 昌子氏に師事している。

M.ラヴェル ／ 水の戯れ
Maurice Ravel (1875-1973) // Jeux d'eau

M.ラヴェル ／《鏡》より
Maurice Ravel // Miroris
- 第2曲　悲しい鳥たち　Oiseaux tristes
- 第3曲　洋上の小舟　Une barque sur l'océan
- 第4曲　道化師の朝の歌　Alborada del gracioso

【解説】

19世紀から20世紀初頭にかけてフランスで活躍したM.ラヴェルは、印象主義的なピアニズムや多様な和音を駆使するとともに、ソナタ形式を用いるなど古典的要素にもこだわり、それらを融合して自らのスタイルを確立した作曲家であった。

《水の戯れ》は1901年、パリ音楽院在学時に作曲されたソナタ形式の曲。冒頭、"Dieu fluvial riant de l'eau qui le chatouille... (水にくすぐられて笑う河神) "という言葉が添えられており、古典的要素と詩的な形容の融合がさらに推し進められた楽曲である。光の加減と共に変化する水の色彩や音響が、ピアニスティックで精巧な書法で描かれている。

《鏡》は、1904-05年に作曲され、標題がつけられた5曲からなる曲集である。自由な形式で書かれ、音楽語法や各曲の標題の追求がされている。5曲すべてが、自身も所属したアパッシュという芸術集団のメンバーに献呈された。

第2曲は、作曲家、リカルド・ビニェスに献呈。都会に住む同時代人の孤独感を鳥に見立てた楽曲。澄んだ単音や静かな不協和の余韻が孤独感や哀愁を引き立たせている。第3曲は、画家、ポール・ソルドに献呈。ゆらゆらと揺らめく波に行先を委ねたり自然の脅威に翻弄されたりと、海原に浮かぶ小さな舟の様子が拍子や強弱の細やかな変化によって描かれる。第4曲は、詩人、M.D.カルヴォコレッシに献呈。スペイン風舞曲。独特のリズムにより戯けた様子が描かれているが、その中に哀愁漂う響きがあり、二面性が際立つ楽曲となっている。

3. 相田 実久（ピアノ）

Profile

栃木県出身。洗足学園音楽大学ピアノコース卒業。ヤマハ音楽教室にて学ぶ。これまでにピアノを中山 育代、梶木 良子、松浦 健、鳥羽瀬 宗一郎の各氏に師事。フィンガートレーニングを恩田 明香、室内楽を羽川 真介、安永 徹、市野 あゆみの各氏に師事。

R.シューマン ／《クライスレリアーナ》作品16
Robert Schumann (1810-56) // Kreisleriana op.16
- 第1曲　Äußerst bewegt（激しく動いて）
- 第2曲　Sehr innig und nicht zu rasch（心をこめて、速すぎずに）
- 第3曲　Sehr aufgeregt（激しく駆り立てられて）
- 第4曲　Sehr langsam（きわめて遅く）
- 第5曲　Sehr lebhaft（生き生きと）
- 第6曲　Sehr langsam（きわめて遅く）
- 第7曲　Sehr rasch（非常に速く）
- 第8曲　Schnell und spielend（速く、諧謔をもって）

【解説】

《クライスレリアーナ》はシューマンの最高傑作である。ロマン主義文学の作家であるE.T.A.ホフマンが書いた作品、『カロ風幻想作品集』『牡猫ムルの人生観』に登場する楽長クライスラーから霊感を得て作曲されたと言われている。作曲された1838年は、結婚を誓いあっていたシューマンとクララが、彼の師にあたるヴィークより結婚を反対され、苦悩していた時期である。彼は自分より一世代上の作家E.T.A.ホフマンに傾倒しており、かなわぬ恋を描いたこの小説に自分とクララとの恋愛を重ねていた。この頃の彼は音楽の創作が唯一の救いであり、ピアノ作品の傑作が多く生まれたのもこの時期である。彼は婚約者クララに宛てて、「ああ、クララ、わきあがってくる妙なる音楽、なんと美しい旋律…《クライスレリアーナ》と名付けるつもりだ。君と君への想いが主役です」と述べている。当初は彼女に捧げる予定だったが公的には友人ショパンに献呈されている。

作品の感情の大きな揺れはシューマンのヴィークに対する憤り、クララに対する愛、愛する二人の未来への希望と不安などの交差であり、秩序と混沌をテーマに作曲されたように感じる。また1840年に結婚するまで、会うことさえままならなかった2人は、手紙のやり取りとシューマンの作品を通して愛を確認していたのである。この作品はシューマンがクララに送ったラブレターである。

全体は8曲の小品から構成されている。深くからわきあがる悪魔的な興奮、一転した慰めと平安な世界、諦念ともうけとれる諧謔が現れ、曲が展開されていく。冒頭曲の低音音列が全曲の中心動機として全体に練り込まれ、意識下の統一がはかられている。

ピアノ
12:45
▼
▼
▼

4. 森合 爽子（ピアノ）

Profile

神奈川県出身。東京女学館高等学校卒業。洗足学園音楽大学ピアノコース卒業。在学中にアンサンブル・スタディクラスで歌曲伴奏を学ぶ。第13回フレッシュ横浜音楽コンクール大学生S部門の銀賞、連弾S部門の銀賞を受賞。これまでにピアノを平松 薫、室内楽を清水 将仁の各氏に師事。現在ピアノを内田 ゆみ子、歌田 紀子、歌曲伴奏を森島 英子の各氏に師事。

F.リスト ／ ピアノ・ソナタ ロ短調 S.178 R.21
Franz Liszt (1811-86) // Sonate für Klavier h-moll S.178 R.21

【解説】

フランツ・リストは《ピアノ・ソナタ ロ短調》の自筆譜の表紙に「1853年2月2日」と記しており、前年からこの日にかけてこのソナタの作曲をすすめたと考えられる。この大曲はロベルト・シューマンに献呈された。

リストはもととなる旋律を絶え間なく発展させ、様々な装いで登場させる〈主題の変容〉という手法をよく用いた。このソナタにおいても、以下の4つのテーマがテンポ・リズム・調・性格を変えながら全曲を通して機能することで楽曲に統一性をもたらしている。

冒頭のテーマ1 は、2回の打撃と下行音階から成る。テーマ2はこのソナタの重要な主題となり、2つのモチーフから構成される。(1つ目はオクターブ上行、7度の跳躍下降を含み、何かを言い切るように断定的な分散和音で下降するモチーフ、2つ目は三連符によるアウフタクトと、不気味で力強く疑問を投げかけるように低音で演奏される同音反復を核とする)。テーマ3は「2度上行+3度上行」という音形を中心とし、3/4または3/2といった3拍子形でしか出てこない。アンダンテ・ソステヌートで現れるテーマ4は、ppp、dolceで演奏され、穏やかな表情を持つ。

この時期のリストは、交響詩やピアノ協奏曲などの多楽章の要素を持った単一楽章の作品を集中的に作曲しており、《ピアノ・ソナタ ロ短調》もその傾向に沿って作曲されている。全体をソナタ形式として見ると、テーマ2が第1主題、テーマ3が第2主題にあたる。多楽章作品として見ると、テーマ4が中心となるアンダンテ・ソステヌートが中間の緩徐楽章となる。ピアノ・ソナタの歴史においても、独自の魅力を持つ傑作と言える。

5. 有賀 瞳（ピアノ）

Profile

東京都出身。都立総合芸術高等学校音楽科を経て、洗足学園音楽大学ピアノコース卒業。第32、33回JPTAピアノ・オーディション奨励賞受賞。第6回東京国際ピアノコンクール一般部門第4位(2位無し)。2011年、英国王立音楽検定試験（ABRSM）実技部門においてグレード8を優秀賞で取得。大学在学中、2017年度ピアノコース特別選抜演奏者に認定。同年ピアノコンチェルトのタペにてソリストとして現田 茂夫氏と共演。卒業時、優秀賞を授与され卒業演奏会に出演。大学院コンチェルトのタペにてソリストとして現田 茂夫氏と共演。これまでにピアノを浜田 佳由里、北神 純一、室内楽を羽川 真介の各氏に師事。ピアノを北島 公彦、室内楽を市野 あゆみ、安永 徹、北島 公彦の各氏に師事。

S.ラフマニノフ ／《楽興の時》作品16
Sergei Rachmaninoff (1873-1943) // Moments Musicaux op.16
- 第1曲　Andantino
- 第2曲　Allegretto
- 第3曲　Andante cantabile
- 第4曲　Presto
- 第5曲　Adagio sostenuto
- 第6曲　Maestoso

【解説】

S.ラフマニノフはロマン派～近現代に活躍したロシアの作曲家、ピアニストである。《楽興の時》作品16は異なる性格を持つ全6曲から成る作品集で、題名はシューベルトの《楽興の時》を連想させるが、短調曲が多く、悲愴的な雰囲気でまとまっている。また、極めてヴィルトゥオーゾ的な奏法はリストやショパンらの影響を受けていると思われる。奇数番は叙情的、偶数番は劇的な性格を持ち、全体がロシアの広大な大地の中で色鮮やかに移りゆく自然の情景に彩られている。

〈第1曲 変ロ短調 アンダンティーノ（やや緩やかに）〉は、波打つ湖を思わせるような静かな哀愁漂う曲想をもつ。夢が消えるように弾け、深い悲しみに落ちてゆく。〈第2曲 変ホ短調 アレグレット（やや快活に）〉は、非常に技巧的で繊細な指の運びを要する、流麗な流れの中に哀愁を漂わせたダイナミックで悲劇的な作品。〈第3曲 ロ短調 アンダンテ・カンタービレ（歩く速さで 歌うように）〉は、「葬送行進曲」とも言われる。重厚感のある息の長い旋律は俯きながらぽつぽつと歩く人を思わせるようで叙情的である。〈第4曲 ホ短調 プレスト（急速に）〉では、超絶技巧練習曲のような左手の急速なパッセージに乗って情熱的なメロディが奏される。テーマは反芻されながら大きく成長し劇的に幕を閉じる。〈第5曲 変ニ長調 アダージョ・ソステヌート（緩やかに 維持して）〉は一転、淡い光に包まれる優しさに満ちてゆくようで、温かく美しい。〈第6曲 ハ長調 マエストーソ（壮大に）〉は、非常に大きなスケールで書かれたフィナーレにふさわしく堂々としている。

6. 門岡 明弥（ピアノ）

N.カプースチン ／ ピアノ・ソナタ 第1番 op.39「ソナタ・ファンタジア」
Nikolai Kapustin (1937-2020) // Piano Sonata No.1 op.39 "Sonata Fantasia"
第1楽章　Vivace
第2楽章　Largo
第3楽章　Scherzo
第4楽章　Allegro

Profile

神奈川県出身。洗足学園音楽大学ピアノコース卒業。学部３年次より、ピアノコース［アドヴァンスト・ポピュラー・スタディクラス］に在籍。作曲・編曲を門倉聡氏に師事。2015 年に音楽グループ、おもてなし隊を結成。幼稚園や子育てサークル、企業イベント等様々な場所で活動を行っている。2017 年には活動の功績から前田記念賞を受賞。2020 年には若大生の生き方を考えるオンラインマガジン「オトラボ」を立ち上げ、現在はソロ・伴奏を始めとした演奏活動のほか、編集者・ライターの顔も併せ持つなど、枠に囚われないマルチな活動を展開している。第 21 回 PIARA ピアノコンクール全国大会においてアポロ奨励賞を受賞。第 21 回九州音楽コンクールにて金賞を受賞。ピアノを鈴木 志保、野村 涼子、門倉 美香の各氏に師事。

【解説】

N.カプースチンは、1937年にウクライナで生まれたコンポーザー・ピアニストである。作品のスタイルはクラシック音楽の体裁を保ちつつも、その形式の上にスウィングやビバップといったジャズの語法や、ラテン、ロックのリズムなどを始めとした幅の広い音楽要素を融合し、華やかで独創的な曲を数多く生み出してきた。

《ソナタ・ファンタジア》は4つの楽章からなるピアノ・ソナタだが、実際にソナタ形式で書かれているのは第4楽章だけであることから、作曲者自身が「ファンタジア」の異名をつけたとされる。

第1楽章、ヴィヴァーチェ。即興的な導入部で始まるこの曲は、テーマと3つの変奏によって構成されている。変奏を重ねるごとにテンポが速くなり、次第に華やかさも増していくことが特徴的。最後は元のテンポに戻り、導入部のモチーフによって曲を締めくくる。第2楽章、ラルゴ。三部形式で構成されており、第1楽章のアタッカから続く本楽章は、物憂いな雰囲気を持った主要テーマを持つ。曲想は次第に活気を帯び、移ろいながらも最後は透明感のある響きによって閉じられる。第3楽章、スケルツォ。複合三部形式で形作られ、ここまでの楽章間で間は空けず、1つの流れとして作られている。第4楽章、アレグロ。唯一のソナタ形式の楽章となっており、壮大さ・自由さを予感させる導入部を経て、目まぐるしいパッセージとともに曲が進んでいく。コーダでは導入部のパッセージが華やかに拡大され、演奏効果満点に楽曲を閉じる。

ピアノ
14:25

7. 橋本 和磨（ピアノ）

F.シューベルト ／ ピアノ・ソナタ 第20番 イ長調 D.959
Franz Schubert (1797-1828) // Sonate für Klavier Nr.20 A-dur D.959
第1楽章　Allegro
第2楽章　Andantino
第3楽章　Scherzo. Allegro vivace
第4楽章　Rondo. Allegretto

Profile

熊本県上天草市出身。ルーテル学院高等学校芸術コース音楽専攻を経て、洗足学園音楽大学ピアノコース卒業。第 6、7、8 回さいたピアノコンクール本選第 1 位。第 8 回ヨーロッパ国際ピアノコンクール in Japan 全国大会大学生部門銀賞、浜離宮朝日ホールにて受賞者記念ガラコンサートに出演。これまでにピアノを濱崎 恭子、柴田 敏子、チェンバロを上園 未佳の各氏に師事。また青柳晋、浦壁 信二、迫 昭嘉、鈴木 弘尚、E. デルガード、G. ナードル、G. マルタ、L.F. ペレス、M. アウスト、P. パレチニ、S. オズボーン、S. ファルヴァイ、W. ブロンズ各氏のレッスンを受ける。現在ピアノを清水 将仁氏に師事。

【解説】

1828年9月、死の数週間前に、シューベルトは最後の力を振り絞るように3曲のピアノ・ソナタを書き上げた。後に、「シューベルト最後の作品。3つの大ソナタ」と題し、シューマンに献呈された。「最後の3つのソナタ」とも呼ばれるこの3連作は、シューベルトの最も内面的な自己が表現された、シューベルトのピアノ・ソナタ創作の集大成である。その第2曲をなすのが《ピアノ・ソナタ 第20番》である。

第1楽章は、重厚な和音を音価を縮小して連打していく主題から始まる。ソナタ形式の枠組みの中で随所に見られる抒情溢れる歌謡的旋律や、絶妙な転調によって生み出される色彩感には、シューベルト独自の個性が現れている。第2楽章は3部形式による抒情的な緩徐楽章。シューベルトの晩年の心境がつづられているのか、愁いを帯びた旋律が何度も繰り返される。何とも不気味な激しい中間部を挟んで楽章は閉じる。内面世界をじっと見つめているような静寂、絶望、孤独の音楽。第3楽章は、第2楽章とは対照的で、スタッカートのリズムが印象的な楽しげなスケルツォ。しかし、ウン・ポーコ・ピウ・レントで現れる二長調のトリオからは、やはりどこか陰りも感じさせる。トリオの後はスケルツォにダ・カーポして第4楽章へ。第4楽章は、シューベルト的至福感に満ちた歌謡的な主題をもとにしたロンド形式の楽章。ロンドと明示されているが、第2主題がなく第1主題の展開に充てられていることからロンド・ソナタ形式と考えられる。コーダで速度がプレストに上げられ劇的なクライマックスを迎えた後、静かに第1主題を奏し、今度は和音を継続的に強打して、400小節近い長大な終楽章は幕を閉じる。

8. 丸橋 みなみ（ピアノ）

F.シューベルト ／《高雅なワルツ》D.969 作品77より
Franz Schubert (1797-1828) // Valses nobles D.969 op.77
第8曲、第9曲、第4曲、第7曲、第12曲

F.シューベルト ／《感傷的なワルツ》D.779 作品50より
Franz Schubert // Valses sentimentales D.779 op.50
第22曲、第23曲、第27曲、第24曲、第18曲

F.シューベルト ／《舞曲原曲集》D.365 作品9より
Franz Schubert // Originaltänze D.365 op.9
第8曲、第33曲、第36曲

M.ラヴェル ／ 高雅で感傷的なワルツ
Maurice Ravel (1875-1937) // Valses nobles et sentimentales

Profile

神奈川県出身。日本音楽高等学校ピアノコースの特待生を経て、洗足学園音楽大学ピアノコース卒業。ピアノを大西 望、渡邊 梓、久保正子、山内 のり子の各氏に師事。室内楽を西山 郁子氏に師事。ジャズピアノを瀬田 創太氏に師事。フィンガートレーニングを恩田明香氏に師事。

【解説】

シューベルトにとってのピアノ舞曲は、まずは内輪の友人たちの集いにBGMを提供し、なごやかな社交の雰囲気を作り出す曲種だった。やがて腕前が世間に知られていくにつれ、公の大きなダンスホールに招かれてピアノを弾く機会も増えていった。その場の雰囲気にあわせて即興で弾いた曲のなかから、特に気に入ったものを後で楽譜に清書していたようだ。そうして書きためられていった舞曲は、歌曲と並んで初期の出版活動の中心をなした。

《高雅なワルツ》は、12のワルツからなる。高雅というよりは荒々しく生命力に富んだ曲調である。♭系の調は一つも使われず、もっぱら明るい♯系が展開されている。

《感傷的なワルツ》は、34のワルツからなる。そのうち短調で始まる曲はたったの4曲だが、その4曲もシューベルトのワルツの特徴でもある目まぐるしい転調により、必ず長調で終わっている。

《舞曲原曲集》は、シューベルトの生前に出版された8つの舞曲集のうち最初のもので、36曲から構成されている。

M.ラヴェル《高雅で感傷的なワルツ》は、短い7曲のワルツとエピローグから成る。8曲のワルツのそれぞれは、はやさと性格（高雅・感傷的）の対照があざやかなので、切れ目なしで続くときも推移は明瞭である。ラヴェル自身は「タイトルそのものが、シューベルトを模倣して一連のワルツを書くという私の意図を十分に示している。7曲目のワルツが私には一番特徴があるように思える」と語った。1曲目の後半には、ラヴェルが好んだジャズの要素である高次倍音も組み込まれている。この作品ものちに管弦楽編曲され、さらにバレエ化された。

9. 石津 若葉（ピアノ）

C.ドビュッシー ／《映像》第1集より
Claude Debussy (1862-1918) // Images 1er série
第1曲　水に映る影　Reflets dans l'eau

C.ドビュッシー ／《映像》第2集より
Claude Debussy // Images 2ème série
第3曲　金色の魚　Poissons d'or

F.ショパン ／ ピアノ・ソナタ 第2番 変ロ短調 作品35
Frédéric Chopin (1810-49) // Sonata for Piano No.2 in B flat minor op.35
第1楽章　Grave - Doppio movimento
第2楽章　Scherzo
第3楽章　Marche Funèbre / Lento
第4楽章　Finale / Presto

【解説】

《映像》第1集の3曲は1905年に、第2集の3曲は1907年に作曲された。ドビュッシーは、1903年に作曲した《版画》で印象主義的なピアノ書法を確立したが、事物や情景をありのままに表現しようとするこの書法は、この作品でさらに強調されている。第1集第1曲〈水の反映〉は、右手の繊細なアルペジオが、水の表面に反射する光や水の波紋を想起させる。第2集第3曲〈金色の魚〉は、中国か日本の漆塗りの盆に描かれた金魚からインスピレーションを得て作曲されたといわれる。金魚が飛び跳ねるような急速な動きが生き生きと流れている。

《ピアノ・ソナタ 第2番》は、第3楽章の葬送行進曲のみ1837年に作曲され、その他の楽章は1839年に作曲された。ショパンの後期の作品、例えば《ピアノ・ソナタ 第3番》は明るく華々しく曲を終えるが、この作品は第1楽章から第4楽章にかけて長調の割合や熱量、音量が減衰していき、全体的に暗い色調に支配されている。これは葬送行進曲を出発点として構想を練ったことが関係しているのであろう。

第1楽章の冒頭は「死の動機」と呼ばれる減7度の跳躍で始まる。落ち着きがなく不安に駆られたように動く第1主題、コラールのような第2主題を経て、長調で力強く終止する。第2楽章は「死の舞踏」を連想させるような不気味な雰囲気を醸し出している。続く第3楽章は、葬送行進の際に打ち鳴らされる吊鐘の音を模したような低音が、楽章全体を沈鬱なものにしている。第4楽章は終始両手のユニゾンとなっており、まるで墓場に吹く風のようである。最後はffで悲劇的に幕を閉じる。

Profile

神奈川県出身。3歳よりヤマハ音楽教室に通い、6歳よりピアノを始める。2010年までヤマハマスタークラスピアノ演奏研究コースに在籍。鎌倉女学院高等学校を経て、洗足学園音楽大学ピアノコース（ピアノ・プロフェッショナル・パフォーマンス・クラス）を首席で卒業、併せて成績最優秀賞を受賞。第35回かながわ音楽コンクールピアノ部門特選。第3回Shigeru Kawai国際ピアノコンクールセミファイナリスト。2017、2018年度、公益財団法人明治安田クオリティオブライフ文化財団より音楽学生奨学金を授与。これまでに江口 文子、佐藤 俊、後藤 康孝、渚 智佳、江崎 光世、江崎 昌子の各氏に師事。現在、ピアノを浦壁 信二氏に師事。和声学、対位法を平井 京子氏に師事。

ピアノ
16:20

10. 中世古 達也（ピアノ）

F.リスト ／ 巡礼の年 第2年 イタリア S.161 R.10より
Frantz Liszt (1811-86) // Années de pèlerinage, Deuxième année, Italie S.161 R.10
第1曲　婚礼　Sposalizio
第2曲　物思いに沈む人　Il penseroso
第6曲　ペトラルカのソネット123番　Sonetto 123 del Petrarca

L.v.ベートーヴェン ／ ピアノ・ソナタ 第30番 ホ長調 作品109
Ludwig van Beethoven (1770-1827) // Sonate für Klavier Nr.30 E-dur op.109
第1楽章　Vivace, ma non troppo
第2楽章　Prestissimo
第3楽章　Gesangvoll, mit innigster Empfindung（歌に満ちて、内向的な感情を持って）

【解説】

フランツ・リストの代表作でもある《巡礼の年》は彼が生涯に渡って作曲した曲集であり、《第2年 イタリア》は、1838年にマリー・ダグー伯爵夫人と共にイタリアへ旅行に出かけた際に鑑賞したルネッサンス美術作品や文学作品に影響を受けて作曲された。第1曲〈婚礼〉は、ラファエロの聖母の婚礼に影響を受けて作曲された。第2曲〈物思いに沈む人〉は、ミケランジェロの彫刻『考える人』から着想を得て作曲された。第6曲〈ペトラルカのソネット123番〉は、イタリアの詩人ペトラルカの詩から影響を受けて作曲された。

ベートーヴェンは、生涯に32曲ものピアノ・ソナタを作曲し、1818年から晩年の1820年にかけてベートーヴェンは、後期三大ソナタと言われている作品109から作品111のピアノ・ソナタを作曲した。このソナタはロマン派音楽のように叙情的で美しい響きを持つ。第1楽章は、4分の2拍子のソナタ形式である。優しく甘美な第1主題と、重々しい響きと動きの第2主題が交互に現れ、叙情的な旋律が楽章全体を支配する。第2楽章は、8分の6拍子で書かれたソナタ形式のスケルツォ。第1主題は勢いよく開始され、ロ短調の第2主題が提示されながら、展開部ではカノン風に処理され、第1主題が力強く現れ再現部では第2主題もホ短調に移され、クレッシェンドで力強く終止する。第3楽章は4分の3拍子のアンダンテで書かれた変奏曲。極めて長大な楽章でこのソナタの中核をなす。主題は6回に渡って変奏され、最後に主題が回想されて終わる。

Profile

千葉県千葉市出身。5歳からピアノを習い始める。安田学園高等学校を経て、洗足学園音楽大学ピアノコース卒業。現在は声楽伴奏を中心として数々の演奏会に出演している。これまでピアノを宍倉 香織、清田 千寿子、中道 敦子の各氏に、歌曲伴奏を森島 英子氏に師事。現在ピアノを皆川 純一氏に、チェンバロを上園 未佳氏に師事。大学院在学中にジュリアーノ・アドルノ、ジャン・ジャック・バレの各氏の特別レッスンを受講。

11. 竹﨑 聡子（ピアノ）

D.スカルラッティ ／ ソナタ ニ短調 K.1 L.366
Domenico Scarlatti (1685-1757) // Sonate d-moll K.1 L.366

D.スカルラッティ ／ ソナタ イ長調 K.208 L.238
Domenico Scarlatti // Sonate A-dur K.208 L.238

D.スカルラッティ ／ ソナタ イ短調 K.175 L.429
Domenico Scarlatti // Sonate a-moll K.175 L.429

S.プロコフィエフ ／《3つのオレンジへの恋》からの2つの演奏会用断章 作品33bis
Sergei Prokofiev (1891-1953) // 2 pieces from "The Love for Three Oranges" op.33bis
第1曲　行進曲　March
第2曲　スケルツォ　Scherzo

G.フォーレ ／ 主題と変奏 嬰ハ短調 作品73
Gabriel Fauré (1845-1924) // Thème et variations en Ut dièse mineur op.73

【解説】

D.スカルラッティはJ.S.バッハ、ヘンデルと同年の1685年イタリア生まれ。555曲ものチェンバロ・ソナタを残した。K.1の溌剌と乾いた鋭い響き、K.208の流麗な美しい旋律、K.175の鋭い不協和音とスペイン色がそれぞれ特徴的である。

《3つのオレンジへの恋》はプロコフィエフがアメリカ滞在中の27歳の時に、イタリアの寓話をもとに作曲したオペラ。6曲からなる管弦楽組曲に編曲した後、さらに2作品のみピアノ用に編曲した。ユーモア溢れるプロコフィエフ独特なリズムと和声感が強烈である。

《主題と変奏 嬰ハ短調》は1896年、フォーレのもっとも円熟した時期に書かれた作品であり、最大傑作のひとつといわれる。がっしりと構築された動機の発展をみせながら、壮大で雄弁に語る音楽は、フォーレの全作品中でいささか特殊な存在ともいえる。主題:荘重で力強いリズムに支えられて上昇する旋律線はこの変奏曲においてつねに支配的。ABA' BA' の形式。第1変奏:主題はそっくり低音に歌われる。第2変奏:切断された主題が動きを持って高潮する。第3変奏:エネルギッシュなリズムをきかせる。第4変奏:激しく情熱的、主題は内声に現れる。第5変奏:のびやかで上向きな旋律が奏される。第6変奏:沈鬱な低音で歌う。第7変奏:自由なカノンが少しずつ激していく。第8、9変奏:落ち着きから、絶妙な美しさへと到達する。第10変奏:きわめてよく発展し、フィナーレ的性格をもって著しく高潮する。第11変奏:後奏曲、暖かい静けさの中にクライマックスを迎え沈静していく。

Profile

熊本県出身。熊本県立水俣高等学校を経て、洗足学園音楽大学ピアノコース（3年次よりアンサンブルスタディークラス在籍）卒業。現在ピアノを浦壁 信二氏、フィンガートレーニングを恩田 明香氏、室内楽を市野 あゆみ、安永 徹、大野 かおるの各氏、バレエ伴奏を稲葉 智子氏に師事。

12. 服部 直士（ピアノ）

D.ブクステフーデ [S.プロコフィエフ編曲] ／ オルガン前奏曲とフーガ ニ短調
Dieterich Buxtehude (ca.1637-1707) [arr.Sergei Prokofiev (1891-1953)] //
Organ Prelude and Fugue in D minor

F.ジェフスキー ／ ある生涯
Frederic Rzewski (b.1938) // A Life

O.メシアン ／《幼子イエスに注ぐ20の眼差し》より
Olivier Messiaen (1908-92) // Vingt Regards sur l'Enfant-Jésus
第13曲　降誕祭 Noël

松平 頼暁 ／ アルロトロピー
Yoriaki Matsudaira (b.1931) // Allotropy

【解説】

《オルガン前奏曲とフーガ ニ短調》は、デンマーク出身の作曲家ディートリッヒ・ブクステフーデが作曲したオルガン曲(BuxWV.140 ニ短調)を、ロシアの作曲家セルゲイ・プロコフィエフがピアノ独奏用に編曲したものである。原曲のオルガンの雰囲気を大切にしながら、プロコフィエフの独特の作風が伺える。

《ある生涯》は、アメリカの作曲家フレデリック・ジェフスキーがジョン・ケージの死後作曲したピアノ独奏曲である。心臓の鼓動を表しているかのような、G音の連続は、まるで作品そのものが生きているかのような実感がある。ケージへの追悼の想いを込めてか、ケージの代表作《4分33秒》にちなんで、演奏時間は4分33秒となっている。

《幼子イエスに注ぐ20の眼差し》は、オリヴィエ・メシアンが作曲したピアノのための組曲。メシアン特有の移調の限られた旋法、逆行不能のリズム、鳥の歌などの作曲技法が盛り込まれている。第13曲〈降誕祭〉は、キリストの生誕を意味しており、荘厳な鐘の音から始まる。

《アルロトロピー》は、松平頼暁が1970年に作曲したピアノ独奏曲である。冒頭に連打が提示され、しばらくクラスターと連打が組み合わされた後、「タ」や「パ」といった声とともにやや点描的な連打が現れる。叫び声を伴うクラスターの暴力的な連打、「シュ」という無声音とpppによる連打の組み合わせ、それまでに登場した要素の総合的な提示を経て、フレデリック・ショパンの〈雨だれの前奏曲〉に至る。最後はピアノの中に向かって拍手を行う。

Profile

兵庫県神戸市出身。大阪音楽大学音楽学部音楽学科管楽器専攻（ユーフォニアム）卒業。第19回"長江杯"国際音楽コンクール管楽器部門大学の部において最高位受賞。同コンクール第23回ピアノ部門大学の部優秀賞受賞など他多数受賞する。ピアノをこれまでに小栗 よう子、北川 恵美、鹿喰 登江、鳥居 知行の各氏に、現在、安嶋 健太郎氏に師事。室内楽を菅井 香恵氏に師事。伴奏法を原田 愛氏に師事。Adele D'aronzo 氏による歌曲伴奏法のマスタークラスを受講。ユーフォニアムを曾我 香織、中西 勲の各氏に師事。

洗足学園音楽大学

ひと、音楽、未来、世界をつなぐ。

洗足学園音楽大学は、音楽の学びと実践を通じて、
豊かな社会づくりに貢献します。

【主催】洗足学園音楽大学・大学院　【後援】「音楽のまち・かわさき」推進協議会